

『超大作！ ペルシャ紀行－華麗なる世界遺産を訪ねて』

“ペルシャ 3 大世界遺産紀行 8 日間”

[クラブツーリズム 13879]

出発 平成 23 年 8 月 11 日 (木)

帰国 平成 23 年 8 月 18 日 (木)

添乗員 (TD) : 大井さやかさん

イランに行くことになった。どうして…？友人・知人からは“今どきイランなんて大丈夫？”と危惧する声が多かったが、“心配イランよ、イランお世話だよ～ッ”と親父ギャグで応えていた。しかし、現地は連日 40℃と相当に暑く、宗教上の理由で 1 週間は禁酒ということになるらしい(*_*)。ちょっと、いや大分キツイ(>_<)。

イランといえばイラン革命によってパーレビ王朝が倒され、ホメイニ師が最高指導者についたのは僕が学生時代のことであった。あとはペルシャ絨毯、イラン・イラク戦争に…世界史ではササン朝ペルシャ帝国とかを覚えた記憶がある。

そうそう、小学校の音楽の時間には「ペルシャの市場にて」というのを習った。異国情緒たっぷりのイントロは、ちょっと違和感があって驚かされたが、サビの“タララ～ラララ～♪”の、優美で、ちょっと哀愁を秘めた印象的な旋律の高まりには感動し、長じて、この曲には何やらザワザワして騒がしい感じのある市場（バザール）で美女と遭遇し、ちょっとしたロマンスが芽生えるようなイメージを持っていた。今回の旅行で、そんなロマンスが…と期待しつつも、これくらいの予備知識で、今回も先入観を持たずに旅を満喫しよう！

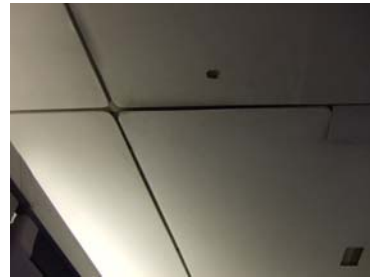
8 月 11 日 (木) 晴れ

36℃にもなるという猛暑日であるが、そんななか日本を脱出！日暮里駅から 11:05 発スカイライナーで成田第 2 ターミナルに向かった。集合時刻（12 時 25 分）の 40 分前には到着し、北団体カウンターで TD の大井さんと対面した。入社してまだ 2 年目ほどの 23～24 歳くらいのアニメの世界から飛び出してきたような超かわいい方であった。後ほど本人から正直な年齢申告があったが、僕の中では 24 歳ということにしておきます。事前の連絡の際、“他に何か知りたいことはありませんか？”と尋ねられ“大井さんの歳は？”なんて失礼なことを聞いてしまっでごめんなさい<(_ _)>。でも“それは会った時のお楽しみです！”という切り返しには参りました。

14:55 発の IR801 便には 15:30 に乗り込んだが中々離陸せず、夕立の中を、ようやく 16:22 に Departure となった。ジャスト 3 時間で北京に到着し、機内の清掃やクルーの交替・申し送り等で 1 時間半のブレイクとなった。

イラン航空の機体は超古い B747-SP で、気流の悪いところでは機体がミシミシ〜ッと音を立て、空中分解してしまうのでは？と恐ろしくなった(>_<)

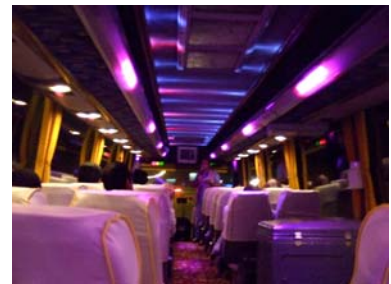
北京から 7 時間 15 分、現地時間 23 時 50 分にテヘラン、イマーム・ホメイニ空港に到着、29℃であった。サマータイムなので日本とは 4 時間半の時差がある。



(レトロなジャンボジェットとテーブルがあるビジネス席 天井がはがれそう〜(@_@;)

1 時間ほどかけてイミグレーションを通過し、バスに乗り込んだのは深夜 1 時 10 分。早速、大井さんからツアーについての 9 つの注意があったが、次の通りである。

- ① バスの走行中、観光中、スーツケースは開けられない
- ② トイレについて（汚い、紙がない等）
- ③ 忘れ物の注意（くれぐれもご注意を）
- ④ ホテルは各自チェックアウトする
- ⑤ 出発前はホテルのロビーで各自スーツケースを必ず確認する
- ⑥ ホテルの部屋のチェックについて（水廻りやエアコン等）
- ⑦ バスの座席について-A、B、C の 3 つのグループに分けてハッピーシート（前列の席）を設ける
- ⑧ モーニング・コールは保険として考え、各自アラームをセットする
- ⑨ ホテルによってはパスポートを回収することもある



(ようやくイランに到着！ 90 年 5 月 21 日って？ ラブホテルを思わせる怪しげな車内)

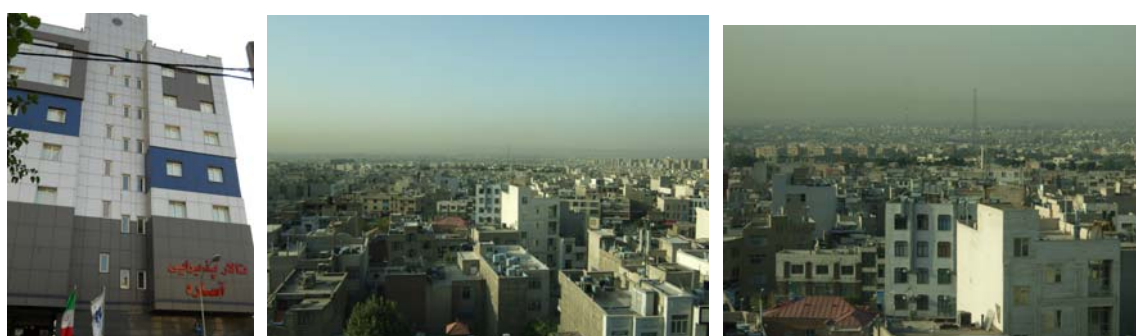
現地ガイドのワヒドはハゲで腹の出た中年のおっさんだが、親しみやすい感じで“わ〜ヒドイ”と覚えてくれと、初っ端から親父ギャグをかましてくれた。車内ではサービスのミネラル・ウォーターが配られ、事前の案内のように US \$ 20 を 200,000IRR と両替してくれた。空港内の DATE にあった日付はイスラ

ム歴で 1390 年 5 月 21 日という意味のようだ。

1:55 ホテルに到着。疲れていて早く眠りたかったが、ワヒドから“パーレビ政権の後、ほとんどの宮殿は博物館や美術館になったが、明日行くゴレスタン宮殿は其中でも古い建物で素晴らしい…、ラマダン（断食）中でも病気の人や妊婦さん、自宅から 24 km 以上離れて働いている場合は食事をして OK…、1990～1997 年に日本（愛知県）にいたとか…を聞き出すことができた。

8 月 12 日（金）晴れ

7 時 45 分のモーニング・コールは鳴らなかったけれど、その前に目覚めてしまい、睡眠不足と時差ボケの中、ペルシャ観光がスタートした。



（アザレーホテルとホテルから見たテヘラン市内　　彼方にミラ・タワーを臨む）

9 時 15 分にロビーに集合し、昨夜のバスでの話通り、まずは大井さんから A・B・C の 3 つのグループ分けについての説明があり、僕は戸塚さんや川原さん、島津さんたちと A グループになり、厳正なるアミダくじの結果、2 日目（本日）と 5 日目が前列（ハッピーシート）ということになった。9 時 35 分にバスに乗り込み、ワヒドのすぐ後ろのハッピーシートに座った。今回のツアーは参加人数が 19 名ということで、1 人 1 シートとゆったり座ることができた。

ワヒドからは“ソップ ヘベイル”（おはよう）と挨拶があり、ドライバーのマヒアーさんのアクセルで一路、テヘランの北にあるサードバード宮殿に向かった。市内で一番高いミラ・タワー（約 360m）を左手に見ながら標高 2,800m にもなるというテヘラン北方の山々に向かってバスは進んだ。これらは茶色の山肌を呈して、イランらしい趣を醸し出していた。

イランには北側を東西に走るアルボーズ山脈と、北西から南東に走るザクロス山脈という二つの大きな山脈があるが、これら前方に見える山々はアルボーズ山脈の一部であるとか、地震が多いので最近の建築物は耐震性を考慮されて造られているとか、テヘランは 110 年程前から首都になったが、以前はレイと呼ばれていたとか、イランのシンボルの花がバラで、動物がライオン、果物がザクロであること。100 種類以上もある豆類、特にピスタチオが特産品であるという説明がワヒドからあった。また、テヘランは北に行くと建物が立派で金持

ちが住んでいるということも付け加えられた。

人口 1200 万人のテヘランには 500 万台の自動車があるというが、イスラムの休日である金曜日、特にラマダンということで、バスはスムーズに進んでいった。さすがに首都ということで道路はキレイに整備されていて快適な 30 分のドライブであった。



(テヘランで最も高いミラ・タワー 金曜ということで道路は空いていた)

アルボーズ山脈の麓にあるサーダバード宮殿は、パーレビ王朝時代、夏の離宮として使用されたところである。バスを降りて 200m ほど歩くとのことであったが…、メープル並木の緩やかだけど結構キツイ坂道を 400～500m も登って進んで 10 時 25 分、緑の宮殿に到着した。メープルの木は葉がたわわに繁るので涼しいということだが、実際、木漏れ日は素敵で涼感を与えてくれた。通常は白の宮殿（メラット宮殿）に行くそうだが、ラマダン中ということでそちらは休みだったために緑の宮殿への入場になったとか(白の宮殿までは 200m だけ緑の宮殿までは少し遠いです～とワヒドが言い訳していたーわ～ヒドイ！)。



(サーダバード宮殿の入り口と全体図)



(緑の宮殿へと続く道はメープル並木が涼感を与えてくれた)

緑の大理石が使用されていることから‘緑の宮殿’と呼ばれている建物は、イランのシンボルであるライオンの像が 2 頭ならんで迎えてくれた。イランには現在ライオンは自生しないが、イラン・オリジンのライオンはインドに 6 頭いるということである。



(緑の宮殿は豊かな緑に囲まれてホッとする雰囲気があった)

宮殿の中に入ると涼しく、66 m²の見事なペルシア絨毯が敷き詰められているのが目に入った(内部は撮影禁止なので、拙い文章で説明するのはムリである)。また、見事なテーブルや椅子はフランス製ということであった。

ウェイティングルームは壁にシルバーがちりばめられ、鏡も貼付されている。昔、イランには鏡がなく外国から運んできていたが、その間に割れてしまうことが多くて、それらを切り貼りして細工した伝統的なものであるという。

セレモニーホールにはさらに重厚な 70 m²の絨毯が敷き詰められていた。

ダイニングルーム～オフィス～金張りのお風呂～ベッドルーム(こんなギラギラじゃあ眠れない！)と巡っていき、階下に進むと 58 m²のレセプションルームがあり、60 m²のダイニングホールの天井はイタリア製の皮が張り詰められて、20 人が座れる大テーブルにはフランス製の食器が置かれていた。



(後ろ姿は現地美女？〔笑〕入口には左右にライオン像が！ 緑が美しい)

帰路の坂道はワヒドと話しながらゆっくりと下った。現在イランには 17～20 人ほどの日本語ガイドがいるそうだが、日本人観光客が減っているのでイラン人の観光客のガイドも担当するとか、サイドビジネスで不動産業いわゆる‘土地ころがし’をやっているとか、なかなか面白い話を聞き出すことができた。また、ペルシャ語の、同じ“ありがとう”でも、“ヘイリー・マヌムーン”はペルシア語由来で“モテ・シャケ・ラム”はアラビア語由来であり、どちらでも OK ということであった。



(二色カラスの蝶ネクタイ 軍事博物館 再びミラ・タワーを見ながら市内へ)

途中、軍事博物館があり、イラクのフセイン大統領から贈られた品があるとかで、緑の宮殿よりもそちらの方が興味深く行ってみたかった。サーダバード宮殿の敷地内にはグレーと黒の二色のカラスがいて、黒の斑点が蝶ネクタイのように見えるというが、数匹が顔を出してくれた。

11 時に出発して、市街地に引き返して絨毯博物館に向かった。



(絨毯博物館 エントランスに飾られている大きな絨毯に思わずため息！)

イランの絨毯はペルシア絨毯として世界中に名を馳せ、ザクロ、くるみ、サフランとかの自然の色を使用しているものも多く、ワヒドは 16 億円もの値がついた絨毯を見たこともあったと話していた。イランでは 3000 年前ころから絨毯が作られ始め、現存している最古のものはロシアの博物館に保存されているという話であった。



(絨毯の大きさが分るでしょ！ ラージュとかについて熱心に説明するワヒド)

ラージュといって 1 c m²の中に縫い込まれている糸の数によって価値が変わり、それぞれの町で造られたもの（町によって独特のデザインがあるという）、遊牧民たちによって造られたもの（シンプルなデザインが多く、自らの村を描いたものなどが多い）に大きく分類され、さらにメッカに向かってお祈りする

方向が記されているミヒラブデザインのものや星座やキリスト、モーゼ、ナポレオン、コロンブス等、人物が描かれた絨毯もある。イスラムなのに人物は大丈夫なのかなあという思いが頭をよぎったが、絨毯は特別なね(^_^)v。



(絨毯に使われる材料と展示されている種々の絨毯)

これまでもトルコやエジプト等で、さまざまな絨毯を見たり製造工程を見学したりしたが、中近東の人々がこれほどまでに絨毯に寄せる想いとは一体何なのだろうか、彼らにとって絨毯とは何なのか？と、いろいろ思いを巡らせてしまった。今回、このように15世紀からの名品の数々を眺めていると、絨毯を芸術品にまで高めた民族の歴史、矜持の一部を感じることができた。



(みごとな絨毯には見とれるばかり！)

絨毯博物館を12時30分に出発し、南（旧市街）の方向に進んで昼食のレストランに向かった。

大井さんから①ラマダン中なのでメニューが変わることもある ②大井さんとワヒドが先にレストランに入る ③席をつめて、グループからは離れないように ④飲み物は別会計 ⑤会計は各自で ⑥毎回の食事時間は大体1時間ほど ⑦トイレには必ず行くように、という注意があった後に昼食となった。

小麦のスープ、アブ・グーシュトというナンに、レモン味のビール（もちろんノンアルコール）にトライしてみたが、レモンソーダそのものであった。デザートはプリンはちょっと硬めであったが、味はまあまあね。

14時に出発して、73年前（ワヒドのお父さんより1つ年上とのこと！）フランス人のデザインで建てられたというイラン外務省を右手に見ながら進み、イラン考古学博物館の見学となった。ここには紀元前6,000年からの遺産が保管・展示されているという。



(硬めのイランプリンとイラン考古学博物館)

館内に入ると、ワヒドからイラン全土図の説明があり、イランの最高峰であるダマヴァンド山は **5604m** であるが、富士山、トルコのアラト山と似ている形であるという話もあった。**9000** 年近く前の石器から、**7000** 年前の土器、**5000** 年前の織物の破片など、紀元前 **2000** 年頃からも牛、馬、ライオン、ワシはよく描かれているが、イランを象徴する動物ということになっているそうだ。



(ワヒドの説明はイランの地図から ハンムラビ法典のレプリカ 出土品は空港を造る時などに出土したものも多いという)



(織物の破片が残っているなんて、イランらしいと思う)



(気の遠くなるほどの昔の遺品が残っているイランは遺跡の宝庫！)

シュース近郊のエラム王国の神殿ジグラットで発掘された雄牛の像には全身に楔形文字が刻まれており、青銅の車輪も紀元前 **20** 世紀頃のものだという。



(青銅製の車輪 テラコッタのライオン像 セラミックのお墓は 3,000 年前のもの)



ペルセポリスの謁見の間にあったというレリーフは見事であった。この残りはペルセポリスの遺跡に現存されているということで、明日、見ることができるとのこと。国の大臣が王に謁見する場面を描いたもので、中央に座る王はダリウス I 世もしくはクセルクセス I 世と言われているが、まだ特定されていないという。角帽はペルシア人、丸帽はメディア人で、口をおさえているのは偉い人の前で口臭を気にしているエチケツトなのだそうです。



(王様はダリウス I 世 or クセルクセス I 世? ダリウス I 世の首なし像))



(ペルセポリス百柱の間にあった柱の一つと楔型文字の板、パルティアの王子像)
紀元前 5 世紀のペルセポリスの柱の牡牛の柱頭はとても精巧で、当時の技術

力の高さを窺わせるものであった。また、パルティアの王子像をじっと見てみると、西安の兵馬俑の兵士に似ているなあと感じた。また、当時使用されていた棺も残っている。また、ソルトマンという 3 世紀のミイラは、塩杭で塩漬けになったおかげでミイラとして保存されたという。



(パルティア人の棺と 1993 年に塩杭で発見されたササン朝時代のミイラとモザイク)

また、古くからイランでは馬はお金持ちのシンボル、牛は土と冬を表わし、ライオンは春と太陽、ワシは王様を表わしているといい、そのような模様が数多くのレリーフに残されていた。

本日の考古学博物館での学習は明日のペルセポリスの見学に役立つので“しっかり頭に入れておいてください〜”とワヒドから注文があったが、なんか解ったような、よく解らなかったような…。

15 時 10 分にバスに戻り、5 分でガラス博物館に到着した。紀元前 400 年から現在に至るまでの、さまざまな陶磁器やガラス工芸品が展示されている。これらのガラスや陶磁器はベネチアングラスや正倉院宝物にも大きな影響を及ぼしたと言われている。こんな話を聞くと、シルクロードの壮大さが身近に感じられ、とても不思議な気持ちになった。



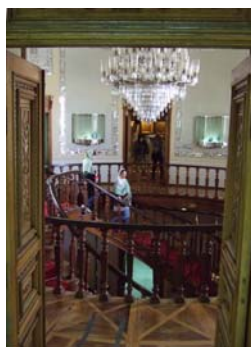
(入口のガラス張り下には骸骨が！ 装飾品やガラス製の香水・薬入れは素敵であった)



(飾り戸棚風でちょっと洒落た感じ)

ジンギスカンに似た顔も！)

ここは展示品もさることながら建物が洒落ていて、1910年に当時の大臣邸として建てられ、その後エジプト大使館、アフガニスタン大使館として使用されてきたという。さすが元大使館というだけの風格を感じさせられた。



(元々はイランの大臣邸であったが、エジプト大使館～アフガニスタン大使館として使用されていただけに、アールヌーボー様式とペルシア様式が見事に融合していて美しかった)



(真ん中は王様が戦争に行っている間、王妃たちが涙をためたという涙壺)

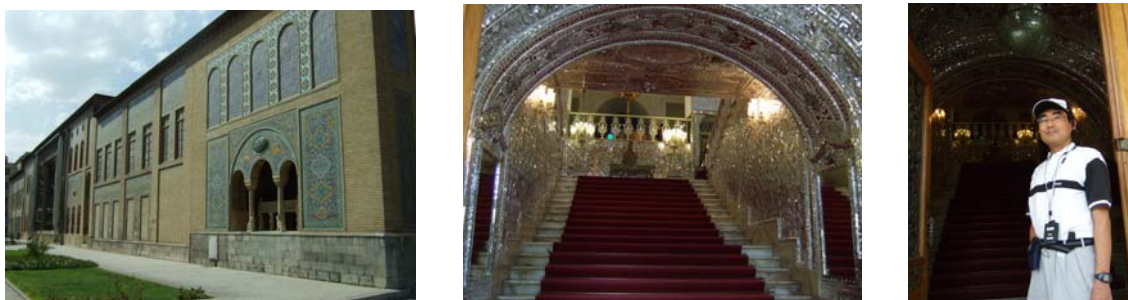
15時35分に集合して、バスでノフェルシャトーという道を進んで—この名はホメイニ師がフランスに亡命していた際に住んだノフェルシャトーという地名に因んだものだそう—テヘランで1番古いサングラジ公園を左に見ながら進み10分ほどで下車した。

左に財務省(病院っぽく見えた)、右に裁判所を見ながら、ゴレスタン宮殿まで歩いたが、その際ワヒドからイランでは1家族ひと月600まではガソリン1040円、それ以上になると70円になるという話があった。これはイランが原油国であるにも拘わらず製油所が少ないため、ガソリンの値段が意外に高いということである。へえ～(*_*)。



(ゴレスタン宮殿の後ろには財務省が聳えていた プールが涼しげ 美しいタイル)

昨夜ワヒドから素晴らしいと聞いていたゴレスタン宮殿に入ろうとすると、何やらワヒドが係員とモメ始めたが、本日の入場は終了したとのこと(>_<)。まだ 16 時前だが、『地球の歩き方』によると開場時間は 9:00~15:00 とあり、こりゃあムリだと思ったが、何やら袖の下を出したらしく??館内に入場しないことを条件に宮殿の庭園に入ることを許可された(さすがワヒド(*^^)v)。



(宮殿の中は美しいガラスが貼られていて、中に入れないのが残念であった)

この宮殿はテヘランが首都になったガジャール朝の王宮として使用され、歴代の王様が過ごした所であり、その敷地は 3.8ha もあるという。入口にはイランのシンボルであるライオン像が待ち受けていた。考古学博物館でも思ったのだが、このライオンが中国を経て日本に伝わって狛犬になったんだよなあ～。



(ゴレスタン宮殿にもライオン像が待ち受けていた)

風採り塔から入る風で天然のクーラーのような構造になっているという建物も見られたが、昔の人々が様々なことを考案・工夫・実用してきたことに敬意を表したい。人間の英知というのは際限なく素晴らしいので、原発や化石燃料の代わりとなる有効な自然エネルギーが活用されて、一日でも早く日本が在りし日の輝きを取り戻せるよう祈りたい気持ちになった。



(建物上部には風採り塔がある 広々とした宮殿は半日ほどかけて巡ってみたい)

暑かったけれども、美しく整備されている庭園には思わず心が和んだ。もう少し涼しい時期に散歩したら素敵だし、庭園内には7つも博物館があるというので、半日くらいをかけて一つ一つをゆっくり見て廻りたいと感じた。



(庭園は美しく心が和んだ　小さな売店があったが店員がいないのよ～！)

16時30分に出発し、20～30分でアザディ・タワーに到着した。テヘランの象徴とも言えるこの塔は、ミラ・タワーができるまで最も高い建物であったという。この逆Y字の塔はペルシャ建国2500年を記念して1971年に建てられたので、ちょうど40歳(不惑)になる。

周囲の道にはたくさんの自動車が走っていたが、なぜか日本車はほとんどなくプジョーをはじめとした欧州車が多かった。近くに停車していたパトカーはCベンツであった。



(アザディ・タワーはテヘランのランドマーク　夕食はビーフとナン、ルビア・ポロウというピラフであった)

30分ほどしてイマーム・ホメイニ広場を通過してホテルに戻り、19時から夕食となった。ワヒドがラマダンで3kgも痩せたと話していたが、元の体重は85kgもあったんだって(デブ！)。20時20分になるとアザーンが響き、本日のラマダンの終了となった。20時半に部屋に戻り、明朝3時45分のモーニング・コールに備えて、早めに眠った。

8月13日(土)　晴れ

テヘランからシラズに空路の移動となるため、3時45分起床、4時15分荷物出し、4時35分ホテル出発となった(^_^)。明け方の月は意外に明るく、TVではメッカの巡礼の様子が放映されていた。長い長～い一日がスタートした。



(14 番目の月が見えた TV ではメッカの様子が放映 空港にあったイラン航空のマーク)

朝食用の弁当を受け取り、ドメスティックのメフラバート空港に向かった。IR235 便はちょっと遅れて出発したが、テヘランを抜けると草木のない不毛の大地がどこまでも続き、山々はザクロス山脈の東の端の方のものであると思われた。乗機の際、どこから来たのか？と声を掛けてくれたイラン人が、なんと歯科医であり (Dr.Bahram)、機内でも、シラーズに着いてからも少し話をした。メールするからアドレスを教えてくださいと言われたので、とりあえず名刺を手渡した。



(6 : 20 のフライトは 6 : 45 に Take off となった メフラバード空港で)



(不毛の大地が続いていた

Dr.Bahram たちと

シラーズの空港)

7 時 55 分にシラーズに到着、19℃であった。8 時 15 分にバスに乗車したが、ドライバーは初日に空港からホテルまでのドライバーだったアーセムさんに代わっていた。“アーセムさん、ソップ ヘベイル”のあいさつから始まり、ワヒドの説明が続いた。シラーズは人口 250 万人、イランで 5 番目に大きな街で、イラン国民が愛する四大詩人のうちのハーフェズとサアディーを輩出した地としても有名で、麦・大麦の産地で 3 期作も行われている。ブドウの産地であり、かつてはブドウ酒が名産品であったが、現在は干しブドウが作られているとい

うことである。

因みに、イランの都市は大きい順に、テヘラン・マシャード・タブリーズ・イスファハン・シラーズであるという。ワヒドは“シラーズは日本で言うと大阪みたいな感じです～”と言っていたが、5番目だったら札幌とか神戸あたりでは？と思った。大阪弁ならぬシラーズ弁とかもあって独特な雰囲気があるのかなあ…まあ、ワヒドは適当な男だから、大阪ということにしておこう！

空港近くには石油精製工場があり、中央分離帯の街灯にはイラン・イラク戦争で亡くなった若者たちの写真がズラッと掲げられていた。実際、この辺りまでミサイルが跳んできたという。イ・イ戦争が終結したのは1988年だから、すでに23年も経過しているにもかかわらず、このような写真が今でもメインストリートに掲げられていることから、両国の複雑な関係が垣間見られる思いがした。コーラン門を見ながらバスはシラーズの街中に入っていた。

コーラン門はシラーズがかつて城壁を有する街であった名残であり、この街の玄関口である。昔の人々は、この門をくぐってシラーズに出入りしていたのだ。今では、その脇の道路を車で通過してしまい…、ちょっともったいない残念な感じがした。門の上部に古いコーランが置かれた小部屋があって、旅人の安全を見守っているとのことだ。また、この門の近くにある建てかけのホテルは、もう何年も建設中で、一向に完成する気配がないという話であった。



(石油精製工場　かつて人々はコーラン門をくぐった　イ・イ戦争で亡くなった方の写真)

9時50分にペルセポリスに到着。バスを降りると暑いものなのって！日差しが痛い～！うだるような暑さの中、イラン最大の遺跡巡りがスタートした。



(超アツい～(^^ゞ　周りには何もない、日陰もない～)

キュロスⅡ世（大王）によってアケメネス朝ペルシャの基礎が築かれ、その後、ダリウスⅠ世がペルセポリス建築に着手し、その子セルクセスⅠ世によ

って完成された都である。当時の行政上の首都はシューシュであったが、宗教上の都（聖都）として建造されたという。①冬が暖かいこと、②材料の入手が容易であること（すぐ隣のラマハト山から石とかの材料を採取）、③山が少し遠くにあって守りやすいことが、この地に造られた条件なのだろう。



（駐車場からトコトコ歩き、エントランスを入ると遠足の小学生たちと遭遇）



（緩やかな傾斜の階段はカッコつけて歩くため？ ワヒドも暑さ対策バッチリ）

ペルセポリスは、まず 14~18mの土台を築いて、その上に構築されていったそう。まずは緩やかな傾斜の階段を上っていく。ワヒドによると、カッコつけて歩くためにこの階段の一段一段が低くなっているとのことだが、「地球の歩き方」には馬に乗っていても上り下りが容易に行えるためとあった（笑）。

階段を上ると、宮殿の正門であるクセルクセス門が現れる。なかなか壮大である。この門のところにある4つの石柱は3本が現存しており、控えの間としての役割も果たしていたという。柱は下からみてまっすぐに見えるよう、少しテーパーに造られているということだ。



（壮大なクセルクセス門）

その先にはペルシャ航空のシンボルマークになっている空飛ぶグリフィン像

を見ることができた。このような動物を作ってしまう古代人の想像力はとてつもなく偉大だと思うが、現代は遺伝子操作によって作ろうと思えば、本当に作れちゃうよね！



(クセルクセス門を抜けると空飛ぶグリフィン像が！)



石と石の間に生じた隙間（継ぎ目）には鉄が流し込まれて補強されていたが、武器に使用するためにアラビア人が鉄を持っていってしまい、それゆえに所々に穴があいた状態になっている。また、偶像崇拝を嫌うために石の頭部は破壊されてしまった(?_?)。

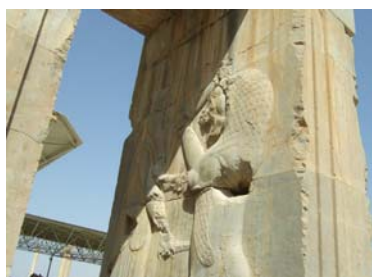


(百柱の間はかつてのペルセポリスの最大の広間であった)

かつては 100 本の柱を有したペルセポリス最大の百柱の間には、当時は財宝が飾られ、朝貢者に対して帝国の膨大な富を誇示していたという。アレキサンダー大王がそれらの財宝を運び出すのに、1 万頭のロバと 5 千頭のラクダを要したと言われている。征服者は何もかもみんな持って行ってしまうんだな。

王が出陣する際に 1 万人が出兵するが、1000 人に 1 人がそれらの隊の隊長で、さらに 100 人が大隊長であり、その 100 人をねぎらうために 100 本の柱となったそう。

王の闘争像は、悪に対する王の力や勝利の象徴であり、また、玉座の王像の玉座をかついでいる臣民は、アケメネス朝に従う 28 の属州が表わされている。



(悪魔と王の闘争像)



(玉座の王像)



様々な手段を応用して、考えられないような重さのものを運んで建造した古代の人々の知恵は、我々の想像をはるかに超えたものである。しかし、このような巨石を使用した遺跡を見ると思うのだが、石切り場からコロを使ったり、地面に油を撒きながら引っ張ったりとか…いろいろな説が唱えられているけれども、もしかすると古代人たちは超力持ちで、“やっこらさっ！”って運んだりしていたかもしれない！！？？…この仮説（古代人超力持ち説―鹿島の第1仮説）が正しければ、ピラミッドやモアイ像をはじめとする数々の巨石遺産の謎も一挙に解決してしまうんだけどね（笑）。

続いて、博物館の見学となった。日陰がなくて暑くて仕方がなかったので、建物（博物館）に入ると聞いたときは嬉しかった～。朱鷺脂色に塗られたちょっと神社っぽい建物の内部には、アレキサンダー大王の攻撃の際のカーテンの燃えカスや銅製のトランペットや釘、昔の印鑑等が展示されていた。



(カーテンの燃えカスをはじめ、トランペット、釘や留め金、印鑑等が展示されていた)



属国からの使者を迎える謁見の間は、高さ 20m の 36 本の柱によって形成されていた。現在は 12 本が残るのみで、むなしく天に向かって聳えだっている。この間の床には美しく磨かれた石が敷き詰められていたというが、布に小さな

石をいれて磨き上げたそうだ。牡牛を襲う勇壮なライオンは、ライオンが「夏」、牡牛が「冬」の季節を表わしている説と、ライオンを「王」、牡牛が「敵」と解釈する説があるという。



(謁見の間の柱 牡牛を襲うライオンのレリーフ)

この謁見の間はアパダーナ宮殿とも呼ばれ、その東階段のレリーフには王に贈り物を献上する属国の使者たちの姿が描かれている。23の国々からの使者は杉の木によって分離され、先頭にはペルシャ人がそれぞれの使者と手をつないでいる。左から、

- 1) エチオピア人：刀と馬と壺 2) リビア人：ヤギと馬車 3) ドラキア人：楯と牛 4) アラビア人：布とラクダ 5) トラキア（マケドニア）人：馬と楯 6) サカルト人：服とズボンと馬 7) ゾグド人：弓や剣、斧など 8) インド人：ワインとロバなど 9) パルティア人：ラクダ 10) ガンダーラ人：弓と楯 11) バクトリア人：ラクダ、ガラス 12) エジプト人：牛 13) スキタイ人：服、ズボン、金の飾り、馬 14) イオニア人：綿、トウモロコシ 15) アラコシア人：ライオンの皮、ラクダ 16) キリキア人：羊、ガラス、楯 17) カップパドギア人：馬、布、ズボン 18) アーリア人：牛 19) バビロニア人：牛、布 20) シリア人：馬車、金の腕飾り、花瓶 21) スーサ人（イラン南部）：ライオン、刀 22) アルメニア人：花瓶と馬 23) メディア人：刀、金製品、服、ズボン（メディア人はペルシャ人と最も仲好だった）という順序で、献上品を捧げている。



(「地球の歩きから」からのコピーであるが、⑬のパルティアと⑮のバクトリアが逆)

ワヒドの説明はと「地球の歩き方」の解説にはチョッピリ違うところがあるけど、属国にエチオピアまでも含まれるというのは当時の大ペルシャ帝国の威光を感じさせてくれた。



(東階段のレリーフは、その国ならではの朝貢品が緻密に描かれている)



(ダリウス I 世の宮殿 宦官のヘルメット 王の頭上にはアフラ・マズダの浮き彫りが)

続いて、ダリウス I 世の宮殿〜クセルクセス I 世の宮殿を見て、女性のために造られた最も美しい宮殿—後宮であるハティーシュでは、近しい親戚になったという宦官は権力を有し、ヘルメットを被っているというレリーフを説明された。これらの宮殿に入る前には身を清め、お祈りをするが、その場所にはゾロアスター教の最高神であるアフラ・マズダが彫刻されていた。



(王の後ろには日傘と馬の毛で作った虫よけを持った侍従が 古代の水道の跡)

その後は、昨日の考古学博物館で見た謁見の間にあったというレリーフ（クセルクセス I 世かダリウス I 世？）を通して、ペルセポリスの全景が見える高台まで登り、アルタクセルクセス II 世の墓まで巡ってきた。ペルセポリスの全景を眺めると、この遺跡が人類史上有数のものであることが理解でき、さらに汗だくになって見学することで、より価値あるものに感じたのであった。

それにしても超暑かったあ〜、よく熱中症にならなかったなあ〜！（^^ゞ。し

かし…丸山さんが軽い熱中症になって、額に冷えピタを貼って頑張っていた(@_@)。



(見学を終えて高台に向かう 謁見の間にあったレリーフ考古学博物館の片割れ)



(アルタクセルクセスⅡ世の墓とペルセポリスをバックにして)



(ペルセポリスの全景－高台から望むと、壮大な遺跡群に思わず固唾を飲んでしまう！)

ペルセポリスから約6キロ北西の巨大な壁面に、アケメネス朝の4人の王の墓があり、これがナクシェ・ロスタムである。向かって左からアルタクセルクセスⅠ世、クセルクセスⅠ世、ダリウスⅠ世、ダリウスⅡ世が眠っている。周囲の点在する石造りの建物はゾロアスター教の神殿とされている。



(ナクシェ・ロスタムの王墓とゾロアスター教の神殿)

墓の下の部分にはササン朝時代のレリーフが描かれ、中でも80万ものローマ兵が攻めてきたのを撃退したという、ササン朝の創始者シャプールⅠ世が馬に

またがって、捕虜にした東ローマ帝国皇帝バレリアヌスを従わせているものは圧巻であった。彼は神から“力の輪”を授かったという。下のレリーフの方が約 1000 年新しいということであるが、同じ壁面の上部がお墓で、その下にこのようなレリーフを彫ってしまうなんて、ペルシャ人て何てアバウトな…。



(ダリウス I 世の墓)



シャプール I 世の騎馬戦勝碑



クセルクセス I 世の墓

12 時 50 分に出発し、左手にとうもろこしやトマト畑を見ながら、10 分で昼食となった。屋外での食事はちょっと暑かったけれど、木漏れ日と吹き抜ける風が気持ちよく、ナスとトマトと牛肉の煮込みは結構おいしかった。



(屋外でのランチは解放感があってグッド！)



ハゼム廟に入っていく)



(ハゼム廟の外観は見事なタイル張り)

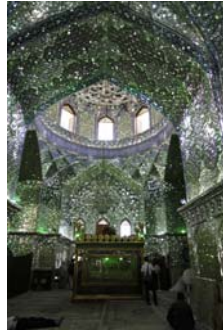
1 時間のランチタイムを終え、バスは一路シラーズへと向かった。しばらくバスに揺られ、15 時 15 分にハムゼ廟に到着となった。誰でも入れるマスジェデ（モスク・寺院）と異なり、通常、聖廟はイスラム教徒以外の入場は許されないそうだが、このハムゼ廟は大丈夫ということで見学ルートに組み込まれているという。靴を脱いで、女性はチャドルを纏っての入場となった。男女の入口も別々で左右に分かれていた。

聖人ハムゼさんについてワヒドが説明していたが、よく聞き取れなかった。何だか放浪している人（ホームレス？）を捕まえたところ偉い人の親戚である

ことが分って…??



(内部の鏡モザイク張りは見事



女性陣はチャドルを纏って色っぽく！)

内部はイラン特有の鏡モザイク張りで、神秘的・幻想的な空間を呈していてとっても美しかった。内部が鏡に覆われているので、ハエが入ってきても鏡の反射によって平衡感覚を失って飛べなくなってしまうので、“ハエが入ってこない〜”とワヒドが自慢げに話していた。

地元の人がお祈りをしたり、寝そべっていたりして、ちょっと違和感もあったが、聖人の廟としてふさわしい感じであった。後で聞いた話だが、ふざけて石橋さんのチャドルをちょっと羽織ったワヒドが、係の人に叱られていたということであった。宗教の人が厳格なのか、それともワヒドがお茶目なのか？(笑)。



(悪ふざけ！)

次にエラム・ガーデンへの入園となった(16時から30分)。5~6月はバラが咲き誇って最も美しいというが、今でも種々の花が咲いておりレモンが生っている美しい庭園は疲れた心身を和ませてくれた。テヘラン大学と並ぶ名門のシラーズ大学が近いからか、若いカップルのデートの場となっているようで、数組のカップルを見ることができた。



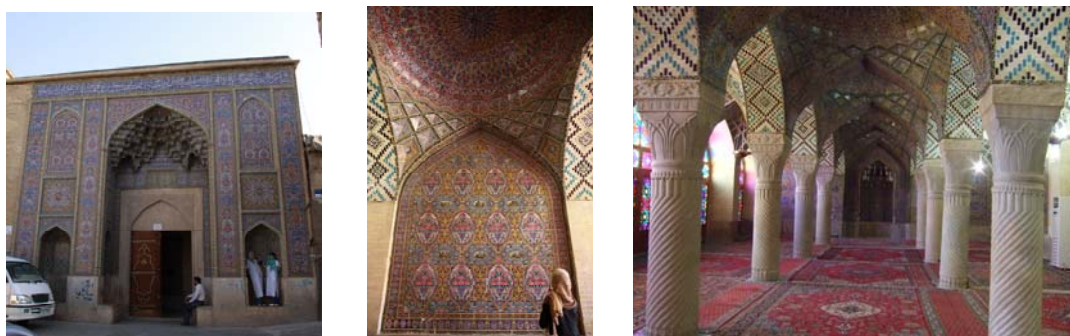
(エラム・ガーデンの入口と美しいエラム宮殿)



(エラム・ガーデンの庭園はキレイに整備されていた キャリーム・ハーン城)

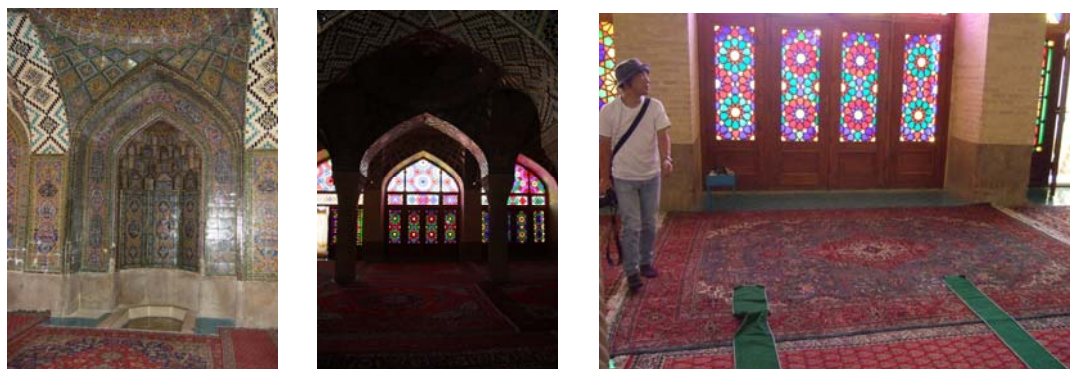
本日の観光予定が少し早めに終了したので、おまけの観光が加えられ、まずはローズ・モスクへと向かった。途中、街の中心部にあるキャリーム・ハーン城の前にある噴水池で、子供たちが水遊びをしている姿が印象的であった。

工事中の路地を進むと、その先にローズ・モスクが姿を現した。イスラムの世界では、赤色は血の色として、元来、モスク等では用いられず、200年ほど前までは赤・ピンクといった色はモスクで使うことはなかったという。しかし、ここシラーズでは欧州人とのコミュニケーションが強くなって、ローズ・モスクで使い始められたという。



(ピンクのタイルが美しいローズ・モスク 内部のタイルも素敵)

この斬新な色彩には驚かされるというより、よくぞイスラムが許したなあと感じてしまった。それにしてもピンクのタイル、夕陽に映えるモザイクは超美しかった。おまけ・付け足しの観光という割にはとても素晴らしく、このモスクを見学できてラッキーであった。



(ミヒラブと夕陽に照らし出された美しいステンドグラス)



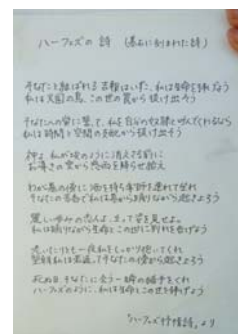
(COW WELL と格子越しの地下)

ローズ・モスクの中庭)

井戸の水を牛に引かせて汲み上げたという COW WELL (牛の井戸) によって中庭のプールに水が満たされたという。地下には、牛が歩いたという道が残っていた。

17 時 15 分にバスに戻り、ハーフェズ廟にはすぐに到着となった。イランで最も偉大で敬愛されている恋愛詩人がハーフェズ (1325~1389 年) である。シラーズに生まれ、そのほとんどを故郷であるこの街で過ごし、その神秘的な詩は美しいリズムと音楽性で知られ、コーランと同じく古くから占いの手段とされたという。彼の詩は、おそらくノストラダムスのように抽象的な感じで、読み方や連想によって様々な解釈ができるようになっているのだろう。

その廟は美しい庭園風となっており、イラン人観光客も多く、ハーフェズが多くの人々に敬愛されていることが理解できた。棺には右下のような詩が刻まれている。



(美しく手入れされているハーフェズ廟とその棺に刻まれた詩)



(ハーフェズの棺と大人気となった小鳥占い)



(小鳥占いの詩と待ちぼうけを食らうアーセムさん ハーフエズ廟の入り口も美しい)

ハーフエズ廟に到着する前にワヒドが小鳥占いの説明をしていたので、是非やってみようと思い、真っ先におじさんを見つけて小鳥に詩片を選んでもらったところ “いろいろなことを、あなたは自分自身でやらなければならない。そうすれば、これからはきっとよくなるでしょう！” ということであつた (ワヒド訳)。もう自分で何もかもやってるしい、これ以上、一体何をしろっていうの～(*_*)。その後、小鳥占いには女性陣が殺到してしまい、小鳥が選んでいる余裕がなくて、おじさんが選んでいた (笑)。

18時10分、小鳥占いのせいで予定よりも10分遅れてバスは出発して、ホテルに向かった。19時よりバイキングの夕食となり、20時30分から夜のシラーズ街巡りに繰り出した。15分前からロビーで待っていると、ワヒドが “ちょっとお祈りしてきますので、少し遅れてしまうかもしれません～” と言ってエレベーターに消えていった。ワヒドは敬虔なイスラム教徒で、しっかりお祈りをして偉い～と思ったが、まてよ！あいつのことだから、『買った土地が値上がりしますように～(^^ゞ)』とか私欲のお願いをしているのかな～と考えると、ちょっと可笑しかった。



(豆の店 えーッ、酒はダメでもタバコは OK なの?)



(ラマダンのお祈り後の夜のシラーズは賑やかだった 凄いマネキン！ ペルシャの満月) ピスタチオやひまわりの種とかの店を見ながらダラダラと歩き回り、夜にな

って活気が出てきた街の雰囲気をも十分に味わうことができた。僕はぜひとも『闇のビール』を手に入れたい～！とワヒドに迫ったが、“闇のアルコールはちょっとムリです～。”と言われてがっかりした。町はずれのちょっとヤバイところに買いに行くらしい…。また、ワヒドは太っているので、医者から毎日少しワインを飲むように言われているそうで、家ではご禁制のワインを作っていると話していた。いい加減なご禁制品なこと～。

“もしかしたら足で踏んでブドウを潰してるんじゃないの？”と聞いたら、“違います～、ちゃんとした器械で潰してます～”だって（笑）。

朝の3時45分のモーニング・コールから、夜のシラズ散策まで、長い長い充実した一日であった。今夜は満月だった。

8月14日（日） 晴れ

7時半少し前に出発、“アーセムさん、ソップ ヘベイル！”のあいさつから始まった。シラズを後にしたバスは北東に向かって進み、一路、パサルガダエを目指した。車中ではクラブツーリズムのイランツアーが8カ月ぶりであり、他の日本人のツアーはいないらしい等の話題になり、その後はペルシャ語の数字についてワヒドから説明があった。1はそのまま、2と3は横に倒した感じとか…そのような説明を受けると、何となく覚えることができ、前に行く自動車のナンバーを見て、彼は“わかりますか～？”と嬉しそうにニヤニヤしていた。

9時30分に世界遺産パサルガダエに到着。ここはかつて西アジア一体をまとめ、繁栄を極めたアケメネス朝ペルシャの最初の都（建国の地）であった。といってもこの遺跡は160haもの広大な規模に及ぶので、遺跡内をバスで移動しての見学となった。

ワヒドからはアケメネス朝を築いたキュロスⅡ世（大王）についての説明があり、傑出した指導者であり、有能な戦術家であり、人々に尊敬された征服者であったこと。バビロンに捕囚されていたユダヤ人の解放者であったこと。200年の後にペルシャ帝国を滅ぼしたアレキサンダー大王もキュロス大王を敬慕し、その政策を模倣して、彼の墓の破壊を禁じたという。

また、キュロス大王については次のような伝説が伝えられている。かつてペルシャを支配していたメディア国王が、自分の娘の腹から木が生えてきて地球の影？ができ、娘の子があなたの代わりに王になるという夢を見たという。それを信じたメディア王は、娘の子（孫）を山に捨てに行くよう兵士に命じた。兵士が赤ん坊を山に捨てに行くと、そこで自分の子供を亡くしたばかりの羊飼いと出会い、その夫婦は代わりにその子を育てることになった。ペルシャで育ったその子は18歳の時にメディアと戦って、これを破ったのである。彼こそが

キュロスⅡ世（大王）であった。後に、その話を耳にしたメディア王は「孫が生きていることを祝うパーティー」と称して、孫を殺さなかった兵士たちを集めて、彼らの子供たちを殺して、その肉で料理を作って食べさせたという。

けっこう急な勾配を上って、まずは“ソロモンの母のベッド”と呼ばれた 2500 年前の城塞に上った。“ソロモン”というのは誤って伝わった呼称で、ソロモンを尊ぶイスラム軍が侵入してきた際に、破壊から免れたという。この城跡は 200 年前くらいまで使用されていたそうだ。城跡から見下ろすと、遠くの山々までほとんど何もない荒野が広がっており、その寂寥感は『兵どもが夢のあと』といった感じにつながった。



（確かに大きなベッドに見える　周囲には何もなく、ちょっと寂しい感じも）



（イラン人の観光客と　岡本さん、今日も写真よろしく！　結構キツイよ！）

次に、“ソロモンの牢屋”と呼ばれるゾロアスター教の神殿跡を見た。ここはキュロス大王の息子キャンブセスのお墓とか、宝物庫とか言われていたそうだ。この建物は修復中であつたが、パサルダガエにはまだ発掘されていない遺跡も数多く眠っているそうだが、将にそんな感じを抱かせる建造物であつた。



（ソロモンの牢屋　裏側から修復中である　奥に見えるのはソロモンの母のベッド）

続いて、キュロス大王の二つの宮殿を巡った。奥の宮殿は黒い石を使ったペルセポリスと異なって白い石を使用し、入口には大王と王妃の（奥さんは1人だけだったと伝えられている）下半身が刻まれており、小さな穴には宝石が埋め込んであったという。パサルガダエの入口の宮殿には高さ13mの483本の石柱があったそうだが、イスラム教徒が来たときに、モスクを建造するために石柱を壊して持って行ってしまったという。後に貴重な遺跡であることが分かって返却された石が、空しく横たわっていた。また、1本の高い石柱を見ていると、かつては威容を誇っていたであろう宮殿が偲ばれると同時に、時の移ろいというか、悠久の時の流れを感じさせてくれた。



（キュロス大王の宮殿のエントランスと下半身のレリーフ）



（奥の宮殿と入口の宮殿 空しく置かれている石柱群）

四角い石柱には、ペルシャ語・エラン語・バビロニア語で『王のなかの王キュロス』と刻まれていて、彼の偉大さを改めて認識できるものであった。



（女性陣、原田さんと一緒に 『王のなかの王キュロス』）

宮殿からバスに戻る際に、石橋さん、丸山さんとタイムマシンの話になり、そこからドラエモンの話に派生したが、石橋さんが“私は『キテレツ大百科』の方が好き！”ということで、“いざ進めやキッチン〜♪〜キャベツはどうした

～♪”等を歌って歩いた。キテレツや藤子・F・不二雄の話が出るたびに、パサルガダエやキュロス大王を思い出しちゃうねえ♪～（笑）。

パサルガダエ最後の見学は、アラビア人からの破壊を避けるため、地元の人々によって“ソロモンの母の墓”と伝承されてきたキュロス大王の墓である。1820年の調査でキュロス大王の墓であることが確認されたという。階段状に積まれた石はピラミッドを思わせるが、実際はロープの張られているところまで石があつて、もう少し大きかったそうだ。この墓にはアレキサンダー大王もお参りしたということだが、キュロス大王がいかに多くの人々に敬慕されたかが窺える逸話である。

また、キュロス大王はバビロン捕囚を解放したことからユダヤ人からも崇拝を受けており、イスラエルと親密だったパーレビ政権時代には、1年に1回、多くのユダヤ人たちがお墓参りに訪れていたという。



（さすがにキュロス大王の墓は立派だった ペルセポリスのビデオが放映）

11時10分に遺跡群を後にした。バスの中では「ペルセポリス 再創造（リクリエイト）」というビデオが流された。バスの中といえ、4日目ともなると、シャイな僕でもたくさんの方たちと話ができるようになった。特に座席が近いAグループの人たちからは、登山家の野口健に似ていると言われ“野口さん～”と呼ばれるようになってしまい、他のグループの方たちは‘野口’が本名であると思って“野口さん～”と話しかけてくる方もいた。言い出しっぺは戸塚さんなんだよなあ～(*_*)。



（ランチのチキンケバブはデリシャス ザクロビール バスの後部にはイラン国旗が！）

12時半過ぎに昼食。ザクロビールは甘くてただのザクロサイダー！他にレモンビール、イチゴビール、ショウガビール等、種々のノンアルコール味付けビールを飲んだが、どれも今いち。普通のノンアルコールビールが一番で、だん

だんと味に慣れてきて、ホロ酔い気分になれたよ(*^^)v。

14 時前にヤズドを目指して出発した。今日は 450 km ものバス移動があるので、お昼に本物の（アルコール入りの）ビールかワインを飲んで、ぐっすりと昼寝したかった～(-_-)zzz。

14 時 35 分にドムンザという小さな町を通過すると、ピラミッド型の建物が目に入った。内部が階段状になっていて 20m ほど下で地下水を凍らせて、その冷却力で冷蔵庫として使われてきたという。

ほどなくしてアバルクという町で樹齢 4500 年の杉の木を見学した。高さ 45 m、周囲は 18m で、ロシアの‘プロフェッサー’が測定して、樹齢 4500 年と推定されたという…（ちょっと怪しい？）。アバルクの町は小さいけれどたくさん遺跡があるということだが、車窓からも美しいタイルのモスクを見ることができた。



（昔の冷蔵庫　樹齢 4500 年？の糸杉　アバルクのモスク　チャイブレイク）

14 時 50 分にバスは再出発し、車内ではチャイブレイクと称して、ワヒドがチャイと昨夜仕入れたビスケットを差し入れてくれ、各席を廻ったのだ。ちょっとホッとするブレイクとなった。その後、彼からは、キャラバンサライ（商隊宿）についての説明があり、①金持ちが国に寄付したもの ②商売としての（有料の）もの ③王族が自らのために造ったもの の 3 つに分けられるということだ。元々のキャラバンサライが現在ホテルとして営業しているというトラディショナルなものもあり、イスファハンにある 16 世紀のものは 1 泊 \$ 500 で、世界で 1 番安い 5 つ星ホテルになっているという。

15 時 15 分、川原さんのリクエストで、道の左右に広がる砂漠に降り立って写真タイムとなった。



（どこまでも無限の荒野が広がっていた　暑いから早く戻らなきゃ～）

15 時 50 分を過ぎると、デ・シール村というところでトイレ休憩となった。ちょうど、この村のモスクの学校の休憩 or 終了時間らしく、建物から出てきた先生と子供たちと一緒に写真を撮った。画像を見せると口ぐちに“メルシー”と応えてくれた。アメリカとの関係が悪いからなのか、子供にはフランス語が教育されているのかなあと思われた。近くにはキャラバンサライ跡もあって、斉藤さんと写真を撮りに行った。



(子供たちに混じってヘンなおじさんが！ ミナレットが美しい キャラバンサライ跡)

ザクロス山脈の東端の山々を抜けて、17 時にタフトというオアシスのような緑が美しい町を通過した。30 分ほどすると、車窓から沈黙の塔が見えてきた。



(険しい山々の間を抜けてタフトの町に出た 沈黙の塔はちょっと不気味だった)

沈黙の塔という名前からしてちょっと不気味だが、ゾロアスター教徒の遺体を葬る鳥葬の場として使われてきた、岩山に設けられた斎場である。ゾロアスター教では火・水・土を神聖なものと考え、それらを汚す火葬や土葬を嫌い、鳥葬が取り入れられてきたのだそうだ。1930 年まで実際に行われて、以降は禁止になったとのこと。1930 年といったら昭和 5 年だから、わずか 80 年前までは遺体を鳥に食べさせていたということになる。

沈黙の塔は高さ 50m ほどの岩山の頂上に造られた、男性は方形、女性は円形の壁で囲まれたスペースである。その中央には穴が掘られていて（実際は 5 m ほどの深さであり、梯子を使って降りて行ったそうだ）、そこに遺体を板で固定して、わざとキズを付けて鳥に食べやすいようにしたという。10 日ほどで食い尽くされるという話であった。

沈黙の塔という名は、ここに来た人々が悲しみのあまり無言で帰っていくことに由来するそうだが、確かに、あまり気持ちのいいところではなかった。岡本さんと原田さんの二人は険しい男性用に、他は女性用の塔に登っていった

が、かなり厳しくて汗だくになってしまった。風が強いという話であったが、それほど吹いておらず登りやすかったかもしれないが…。より険しい男性用に登った岡本さんと原田さん、ご苦労さまでした。



(左が男用、右が女用の塔 中央には穴があった 女用の岩山から男用の塔を望む)

地元のアスリートが、黄色いランニングを着て女性用～男性用の岩山を走っていたのが場違いな感じで、ちょっと可笑しかった。こんなところで鍛えているんだなぁ(^^ゞ。“彼がしたおしっこの後です～(*_*)”と言ってワヒドが笑っていたのが、なお可笑しかった。(ランニング中でも生理現象は仕方ないか！)

家族や親戚たちは、鳥に食い尽くされる間(約 10 日間)、麓の小屋で待機して過ごしたそう。



(ヤズド市街を一望できる 男用の岩山から女用の塔を望む 兵隊が住んでいた宿舎跡)



(この建物で鳥葬が終了するのを待っていたという ヤズドのホテルで、斉藤さんと)

19 時にホテル到着となった。なかなかキレイなこのホテル、ガーデン・モシルでは種々のトラブルに見舞われることになるのだが…。

ダイニングでは番(つがい)のインコが大喧嘩をしており、それは見ている方も恐ろしくなってしまうような壮絶なもので、何やら落ち着かない気持ちで夕食のテーブルについた。涼しげなプールの脇のテーブルでの夕食はちょっと雰囲気良かったが、ここにはノンアルコールビールがなく、仕方なくコーラ

での乾杯となった。



(バイキングの夕食は、屋外のプールの脇のテーブルで

仲の悪いインコ)



(コーラで乾杯～ このホテル、部屋もキレイで雰囲気は良かったんだけどォ～)

21 時過ぎには部屋に戻り、下着の洗濯とかをしながら風呂に入っていると、
‘トントン～’と扉をノックする音が！慌ててバスタオルで下半身を隠して出ると、大井さんのお部屋チェックでした(^_-)☆。部屋に干してあったパンツとかをじっくり見られてしまったあ～。“何かトラブルはないですか？”ということであったが、その時は何も感じなかったので大丈夫と答えてしまったア～(_)

風呂上がり、ウェストポーチが壊れてしまったので縫っていると、なんか暑く、玉のような汗がポタリポタリと滴り落ちてきて…そこでエアコンが故障しているのに気付いた！時刻は 23 時近くになっていた。すぐに大井さんに電話すると、こんな遅くなのにシッカリ対応してくれて、イラン人のやる気のないホテルマンを動かして一初め、今夜はもう空き部屋は無いと言っていたのに一広くてしっかりと冷えるファミリールームへと移ることができた。翌日、斉藤さんが“昨夜は暑くて眠れず、今日は頭が痛い～”と嘆いていらしたが、良かったあ～。

大井さん、ありがとう< (_) >面倒掛けてごめんなさい(^ ^)ゞ。

8 月 15 日 (月) 晴れ

8 時にホテルを出発すると、今朝も“アーセムさん、ソップ ベヘイル”のあいさつでスタートした。ヤズドはイランのほぼ中央に位置し、街の名は神様の名前に由来し『一番きれいなもの』という意味で、かつてマルコポーロにより「優雅な善き町ヤズド」と称賛された古都である。他の地区に比べてゾロアス

ター教徒が多いのが特徴だが、といっても 90%はイスラム教であるという。

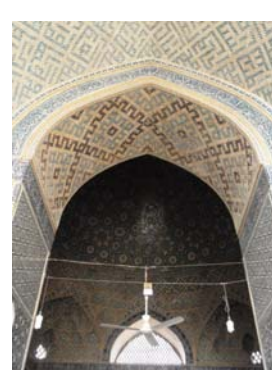
この街は年間の降雨量が 80mm しかないため、長らく地下水路カナートにより山の伏水が運ばれて使用されてきたそうだ（もちろん、現在は水道になっている）。

5 日目ということで、わが A グループはバスの前方席（ハッピーシート）に陣取った。左手にバザール、正面にアミール・チャグマール広場を見ながら進み、15 分でジャメ・モスクに到着した。ジャメ・モスクというのは各地にある最古のモスクのことを指し、ジャメとは金曜の意味であり、すなわち‘金曜のモスク’ということである。また、モスク・広場・バザールの 3 つによって町ができるので、古くからの町には、必ずこの 3 つが存在するという。



（イランで最も高い 52m のミナレットは修理中だった 内部のタイルが美しい）

ジャメ・モスクのタイルはとても美しく、特に青が素晴らしかった。以前、オランダでフェルメールの『真珠の耳飾りの少女』を見て感動したが、フェルメール・ブルーはペルシャのタイルの色から考案されたのではないか…という思いが頭をよぎった。彼は何かの機会に、ペルシャのタイルの色（ペルシアン・ブルー）を知り、その色の原料ラピスラズリの主成分であるウルトラマリンを使用することを思いついたのではないか？うん、きっとそうに違いない（鹿島の第 2 仮説）。



（ペルシアン・ブルーは素晴らしい！）

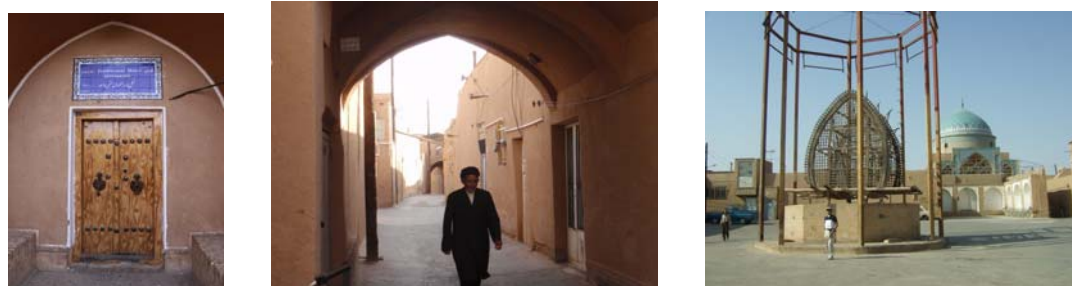
壁の随所に見られるイラン版唐草模様はただの模様でなく、コーランの章句が書かれているそうだ。確かに、良く見ると、そんな感じであった。

また、青いタイルで描かれている逆卍はアーリア人の印であり、昔の国旗にもなっていたという話であった。この逆卍はナチスの逆鉤十字と同じで、インド・ヨーロッパ語族に共通の宗教的シンボルであり、アーリア人の象徴なのだそう。タイルの青と絨毯の赤が美しいコントラストを醸し出し、イスラムの本場にいるんだなあという異国情緒を盛り上げてくれた。



(モスク上部のタイルの模様も大変凝っている そう来るか、おぬし、なかなかやるなあ～！)

ワヒドの後について町の中を歩くと、あたかも迷路のようになっていて、家のドアには二つのノブがあり、男用と女用になっているとのことであった。ドアの両脇には座って待ったり、話したりできるような椅子まで作られていた。



(家のドアには二つのノブが 迷路のような町の中 広場にあった‘お神輿’)

広場にあった木製の巨大な葉っぱ状のものは、お祭りに使われるお神輿のようなものであるという。また、風採りの塔（バードギール）を設けた建物があ、これはヤズドで考案されたものでアーブ・アンバールと呼ばれているとのこと。カナートによって運ばれた水は街中で地下水路となって流れ、それを地下水槽に貯めて、塔から風を取り入れて冷却するとクーラーのようになって涼しいそう。ワヒドが“ヤズドは天然のクーラーの街です～”と言っていた。



(アーブ・アンバールの風採り塔 ヤズドの街中の様子)

続いて、9時15分に水の博物館に到着となった。これもオマケの観光という

ことで、ワヒド、さすがに太っ腹～！ヤズドは天然のクーラーの街！と豪語してしまっただから、この博物館に行くことにしたんだろうなあと思われた。入口は狭くて分かりにくかったが、中庭があり広々と感じさせる造りになっていた。



(水の博物館の入り口は狭小 カナートの水を汲む人の模型)



(アーブ・アンバールの模型や地下に流れる水路)

この博物館は一般の家庭だったものを改築して公開したもので、150 年ほど前に建てられたものである。“陽が当たる部屋は大家が住んだところですよ～”とワヒド。地下はキッチンになっていて、なかなか快適な温度であり、地下 2 階は水路の影響もあってかなり涼しかった。



(ネズミ等に齧られないよう、食物は宙づりにしたそう)



(ヤズドの街中には張りぼてのモスクがあった！)

続いて、ゾロアスター寺院を訪れた。ゾロアスター教は拝火教とも言われる

ように火も尊ばれ、この寺院には古よりの火が灯され、これは 1500 年前（ササン朝時代）から燃え続けているという。比叡山延暦寺にも不滅の法灯があり、これは 1200 年間、毎日菜種油を注ぎ続けられ、一度も消えたことがないというが、宗教の世界って同じようなことが尊ばれるのかもしれないと、神秘的な炎を見てちょっと感慨深い気持ちになった。

因みに、比叡山の不滅の法灯は、火が消えないよう毎日油を絶やさずに継ぎ足しているとのことで、ここから『油断』という言葉が生まれたと言われている。このゾロアスター寺院でも、イランの人々によって同じような言葉ができていたのかなあ？



（ゾロアスター寺院と最高神アフラ・マズダ）

この寺院自体は 75 年前に建てられ、アッダにあった火をここに持ってきたそう。古くからの大切な火は 3 か所にあったが、残っているのはこのみであるということであった。イラン人観光客たちと写真を撮ったのだが、肝心の炎が隠れてしまった…ガラスに反射してしまい上手く写らなかったよ～(>_<)。



（イラン人旅行者たち 右のパネルはゾロアスター 反射して上手く写らない不滅の炎）



（炎の脇にはコーランだか何かの参考資料が ヤズド市内のモスクと売店）

10 時 20 分に出発してヤズドの街を後にした。少し行くと、右手に昨日見た

のとは異なる沈黙の塔が見えた。ゾロアスター教徒は、現在でもインドに約 8 万人、パキスタンに約 5 千人、そしてイランにはヤズド、ケルマンを中心に約 2 万人もいるということだ。



(昨日とは別の沈黙の塔 トラックが横転…！ ランチはデリシャス！お皿もキレイ)

バスではカナートの造り方についての DVD が流されたが、痩せて貧弱なおじいさんが、お弁当のナンを持ってカナートを掘りに行くのがちょっと可笑しかった。あんな重労働なのにナンのお弁当じゃ可哀想だよ(‘_’)。また、トイレ休憩ではアイスクリームを購入して食べたが、なかなか美味しかった。また、しばらく進むとトラックが横転して荷台からはナツメヤシが散乱していた。ワヒドによるとイラン人、特にテヘラン以外では運転がヘタで事故が多いらしい。こんな空いている道路で横転するなんて、よっぽど乱暴なんだろうな。

13 時 10 分にナンイという町で昼食。ゼンレシュク・ポロウ（炊き込みご飯）とチキンがデリシャスであった。お皿も美しくて食欲がそそられ、たくさん食べてしまった。

14 時半に出発、この町の 1000 年前に建てられたというジャメ・モスクを見て、バスは進んだ。ワヒドから、イスファハンの名産品としてギャズというピスタチオ入りのお菓子、絨毯、トルコ石（こちらではイラン石という）等についての説明があった。トルコで採れるトルコ石より、イランで採れるトルコ石（イラン石）の方が良質であるという。そういえば、以前トルコで、イランで採れた方が美しく感じたのを思い出して納得してしまった。



(ジェメ・モスク アーセムさん♡ 休憩時にアーセムさんと丸山・石橋さん)
バスでは島津さん、川原さんとクダラナイことをしゃべり続けた！僕は元来、

人見知りで特に女性にはシャイであるが、彼女たちとは何となくウマがあって、とにかく良く喋って笑った。その会話にときどき戸塚さんのチャチャが入ってきて大盛り上がりとなった。特に、イスファハンのハージュ橋のたもとにあるライオン像の話では熱くなって、外して脇に置いていたメガネを潰して壊してしまった～(>_<)！

このライオン像に乗ると、またたくまに結婚できるということが「地球の歩き方」の143～144ページに書かれてあり、そのことで誰が真っ先に走っていくとか、靴のひもをしっかりと縛らなければとか…（笑）etc

また、ワヒドが日本人からもらったという名刺を見せてくれたので、僕も名刺を渡したら“鹿島さんは歯の先生だったんですね～。僕の歯はキレイでしょ(^_^)v。実は僕はパイロットか船乗りになりたくて、これらの仕事は歯がダメだとなれないので～歯を大切にしてきました～。一応、船乗りの資格をとったけど、ちょうどイ・イ戦争が始まってしまい、真っ先に戦場に行かされてしまうので、親から反対されて、実際に船乗りの仕事には就けなかったんです～。”とかの会話をした。ワヒドの名刺はユーラシア旅行社やクラブツーリズムといった旅行会社の方の名刺が多かった。

16時半にトイレ休憩となり、あと5kmでイスファハンということになった。イスファハンとは「イランの真珠」とも例えられる古都でサファビー朝時代の首都であり、標高1500m、人口は350万人、日本でいうと名古屋といった感じであるとワヒドが話していた。シラズが大阪で、イスファハンが名古屋なのか？何故だろうと思ったが…さてよ、大きい街の順番がテヘラン・マシャード・タブリーズ・イスファハンで、日本の人口は東京・横浜・大阪・名古屋の順だから、共に4番目でいいんだあ！！永遠の謎になってしまうかも(?_?)と思われたが、ワヒドも案外やるねえ～。

この街を東西に流れるザーヤンデ川は、最近、水不足で、その原因として350km上流のコームの町にダムができてしまったためと考えられているとのこと。そのために水量が減ってしまい、イスファハンの人々はちょっと怒っているという話であった。実際、7・8月はほとんど水がないそうだ。

ハージュ橋はイスファハンではシャフレスターン橋に次いで古い橋で133mの長さがある。ハージュとは「貴族」の意味で、当時、この橋の付近に貴族が居住していたことから名付けられたという。上下2層構造になっていて、上層部にはかつてしばしば宴が開かれたというテラスが設けられていて、下層部は水量を調整する水門の役目を果たしていたそうだ。

しかし、ドラえものの‘モーゼ・ステッキ’（単行本31巻参照）で突いたように全く水の無い川にはビックリしてしまった。その河原？はグランド代わりに使えるほど広くて、ハージュ橋を‘橋’と呼ぶにはちょっと違和感があり、

むしろ宮殿という感じであった。フィレンツェのベッキオ宮殿から延びるベッキオ橋を思い浮かべた。また、もし東京でこのように川が干上がってしまったら…すごいものが川底にごろごろ転がっているだろうね～(*_*)。

橋のたもとのライオン像には真っ先に跨ってきたが、その成果は…？



(水のない川にかかるハーजू橋は宮殿のように見えた 真っ先にライオン像に跨る(^^)v)



(全く水がない～、ウッ人影が怪しい！ 武内さん、小さ過ぎて分らないよお～<(_)>)

かつてイラン人は大砲の造り方を知らず、オスマントルコとの戦いの際にアルメニア人を招聘して大砲を製造してもらっていたという。アルメニア人たちはこの川の南の地域に住みついたのだが、彼らとのコミュニケーションを図るために橋が架けられたということだ。そのため、この街の南部には今でもアルメニア人の教会が多くあるという。



(長さ 300m、33 のアーチから成るスィー・オ・セ橋)

続いて、スィー・オ・セ橋 (33 の橋) の観光となった。スィー・オ・セとはペルシャ語で 33 を意味し、橋のアーチが 33 あることからこの名が付いたという。33 というのはキリストが 33 歳で亡くなったことにも由来しているとワヒドが説明していた。ハーजू橋の 133m に対して、こちらは 300m の長さがあり、人々の往来も多くて、活気に満ちている感じを受けた。



(スィー・オ・セ橋は人通りが多くて活気があった)



(川の水が豊富だと、違った感じになるのだろう… イスファハンの道路)

17 時 40 分に出発し、イラン人の家庭訪問ということでバスは南の方角に進んでいった。夕方のラッシュに地下鉄工事を行っているとかで混雑し、40 分くらいでダリアイさん宅に到着となった。イランに地下鉄なんてビックリしたけど、中国の資本や技術が入っているんだろうなあ…と思われ、このような分野にこそ、日本が参入して技術協力をしていけばいいのになあと感じた。

現地の家庭訪問というから、てっきり以前行ったトルコやモロッコのように、土間があったりした一般家庭かと思いきや…超豪邸！パーレビ王朝の崩壊、イラン革命は貧富の差が激しくなったことが一因とされているが、今でも、まだまだ貧富の差は激しいのでは、と感じてしまった。



(鉄筋 3 階建て リビングは超広い！ スイカや名物ギャズをごちそうになった！)

ダリアイ夫人は 60 歳で描画が趣味、ご主人（本日は不在）が撮ってきた写真を見てそれをもとに描くという。また、額も自分で作ってしまうそう。で、ぜひ購入して欲しいということだったが…、誰も買わなかった<(_)>。

30歳の息子は設計技師をしていて、29歳のお嫁さんは大学院で分子生物学を勉強中とのこと。彼らは約3か月前に日本、それも叔母が住んでいるさいたま市に来ていたとのことであった。川口はさいたま市に近いと話したら、何かの機会には！ということで、メルアドを聞かれたので名刺を渡した。

一般家庭の訪問ということで、お土産に日本から手刺繍のハンドタオルを持っていったのだが…。この家だったら、もうちょっと洒落たものにしなくちゃ、合わなかったね(^^ゞ。

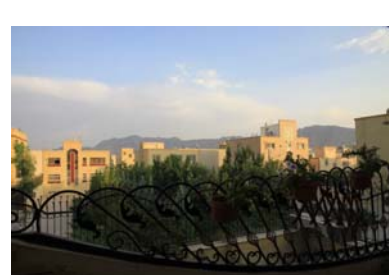
また、お嫁さんから“あなたの奥さんはこの中のどなたですか？”と聞かれたので、“誰だと思いませんか、当ててみてください！”と応えると、パッとある女性を指したが…秘密にしておきます（笑）。キレイなお嫁さんを独占してずっと話してしまったが、何か口説いているように見えたらしく、ダリアイ夫人をはじめ皆ちょっと心配したと、川原さんから後で言われました～(^^ゞ。

お持て成しのスイカは超美味であり、イスファハン名物のギャズも美味しいチャイにマッチしてたいへん満足であった。



(ムンクの叫び！ポーズでもう1枚 ダリアイ宅へのお土産 チーム川口！)

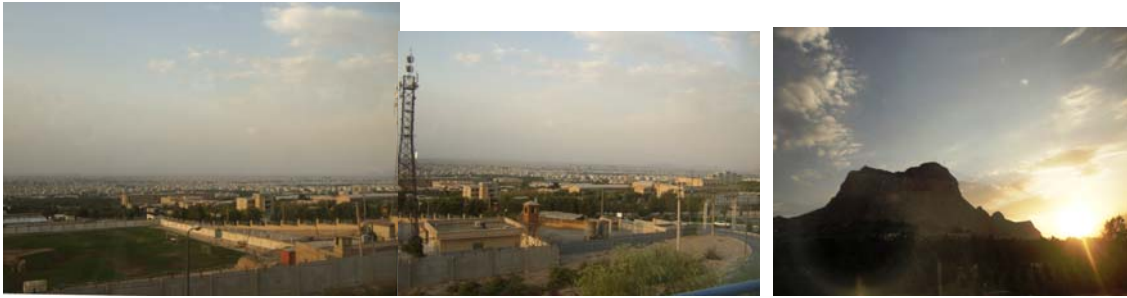
また、このツアーには僕を含めて川口から3名もの参加者がいて、その‘チーム川口’で美しいお嫁さんと一緒に写真を撮ったりした。



(ワヒド～、腹が邪魔！！ ダリアイ夫人の作品の一つ ベランダからの眺望)

ダリアイ家の人々は親切で、とっても友好的な方々であったので、我が国とイランの良好な関係を拡大するためにも、夫人の絵を買わなければいけないかな、誰か買わないかなあ～と思っていたが…。本当にごめんなさい<(_ _)>。

19時にお暇して、右にイスファハン市内、左にソフェ山が見える道を進んでホテルへと向かった。ソフェ山はこの辺りの天体観測スポットになっていて、日食や月食があつたりすると、人々が集まって来るそうだ。



(イスファハン市内を望む ソフェ山は天体観測スポットになっているという)

レストランは中国人が多く、我々はロビー脇のはみ出し部での夕飯となったが、その前にワヒドから買い物の際に負けさせるにはどのように言えばいいのかを聞き出し、食事中およびその前後にずっと暗唱していた。「いくらですか？」は「イーン チャンデ?」、「もっと負けてください」は「ロットファン ビッシタール タッフیف ベディル」「もっと」というのは「ビッシタール」ということらしい。挽き肉のケバブは旨かったが、ダリアイさん宅のスイカが美味しくて食べ過ぎてしまったため、ちょっと苦しかった。



(ケバブの夕食 かつてはキャラバンサライであったアパシーホテルのロビーと中庭)

食後は、21 時 20 分頃より原田さん、丸山さんをはじめとした面々で、街の散策を兼ね、ホテル全体が美術館のように美しいというアパシーホテルへと向かった。途中、ちょっと道が解らなくなり（ホテルの別館の人に聞いたら、迂回するよう言われたのだが…）、ハシュト・ベヘシュト宮殿の方に向かい…そこで地元の女の子に道を尋ねたのだが、彼女は英語が通じず、しかし何やら熱心に説明をして案内してくれたーペルシャ語が解らなくて申し訳ない_(._)_。

英語が通じないなら、さっき覚えてたのペルシャ語を…と思って口に出そうになったのが“イーン チャンデ?”だった。よかった～若い女の子にいきなり“いくら?”なんて聞かなくて(^^ゞ。

歩きながら彼女はいろいろ説明してくれたのだが、いかんせんペルシャ語(*_*;。街かどを左に折れたところでモスクのドームが目に入って、地図と照合した結果、ようやくそこがチャハール神学校であることが解ったけれども…そこで彼女とはさよなら“ボダー・ハーフェズ”となってしまった。神学校のすぐ先の左手が、目指すアパシーホテルであった。



(美術館ように絵も飾られていた アパシーホテルの中庭は素敵でした)

夜の中庭は最高！と「地球の歩き方」にあったので、早速中庭に足を運んだ。ヤズドへ向かうバスの中でワヒドが話していた、かつてのキャラバンサライを改造した（世界で一番安く泊まれる）5つ星ホテルこそが、このアパシーホテルである。

商談に用いられていたという中庭をはじめ、ホテル全体が『千夜一夜物語』の雰囲気を醸し出していて素敵であり、戸塚さんなどは「もしかすると明日の夕食は、このホテルでディナーかもしれない！」と大きな期待を抱かせてくれた。こんなホテルに泊まりたいなんて贅沢は言わないけれど、食事くらいなら？？との淡い期待を抱いたのだが…（期待だけに終わってしまった）。

8月16日（火） 晴れ

7時50分にロビーに集合すると、大井さんから、今日はとてもいっぱい歩く日なので、日焼け対策やクスリ等の忘れものをしないようにとの注意があつてからの出発となった。

まずはイスファハンのジャメ・モスクからの観光となった。ヤズドでもそうであったように、どこの町でも最古のモスクはジャメ・モスクと名付けられているそうだが、イスラムは金曜が礼拝の日なのだから、ジャメ（金曜日）モスクという呼び名は理に適っており、古くから‘金曜はモスクに行くんだなあ’ということの人々に知らしめるには非常に解りやすいネーミングであると感じた。



(ジャメ・モスク周囲、バザールの風景－朝早いのでまだ開店前の店も多かった)

バザールを通過して到着すると、時間が早かったのか何か知らないが、門はし

っかり閉ざされていた。ワヒドが扉を叩いて何とか門を開けさせ、入場することができた。



(トントントン、ソップ ヘベイル〜で何とか入場できた！

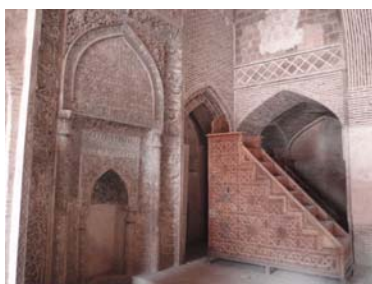
主礼拝堂)

元々は 1000 年程前に建てられたゾロアスター教の拝火神殿であったものをモスクに改修したもので、当初は日干しレンガで造られていたという。このモスクの特徴は四角い建物の上に丸いドームが造られていることで、これはセルジューク朝時代の頭の良い大臣が考案したとかで、このような技術はイタリアよりも 100 年早かったそう。また、かつてはキャラバンサライとしても使用されたということだ。イマーム広場とつながっていて、その間の 3.5 kmにはバザールが続いている。



(ジャメ・モスクの中庭から建物を望むータイルが美しい)

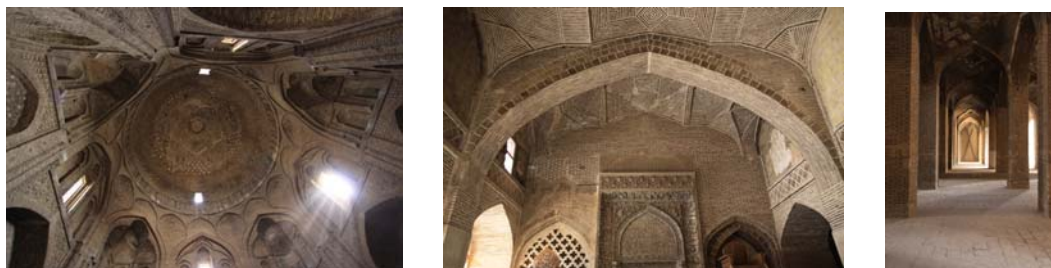
このモスクは‘すべての人々のためのモスク’であり、そのために入口も多く設けられ、イワーンと呼ばれる入り口の門が中庭の四方にあって、托鉢僧のテラス・弟子のテラス・主のテラス・師のテラスと、それぞれに名前が付けられている。



(タイルとは一風変わった、漆喰造りのミヒラブにはコーランの章句が刻まれている)

また、650 年前に作られた‘世界で一番美しい手作りのミヒラブ’も見逃せない

いもので、コーランの章句や唐草模様をあしらった漆喰造りの精緻なレリーフはタイルとは異なって渋い造りになっていて、なかなか圧巻であった。



地下はお祈りの人たちの休憩所になっていて、多くの人々に開かれたモスクであることを感じさせてくれた。ここはイスファハンで最古のモスクであり、各時代において様々な修復がなされているそうだが、最近でも、イ・イ戦争の際にミサイルが当たってしまい修復されたという。



(地下の休憩所とモスク近くの売店　女の子は彫が深くて美人なのよ！)

9時55分にバスは発車し、10時35分過ぎにチェヘルソトゥン宮殿に到着した。ここは1647年、サファビー朝時代にアッバースⅡ世によって建てられた宮殿で、迎賓館として使用されたという。この宮殿はイマーム広場の西側にあり、かつてはアリ・カブ宮殿と庭続きであったそう。



(宮殿は現在、博物館として公開されている。池に映ると40本に！)

チェヘルソトゥンというのは「40の柱」という意味で、実際の柱は20本だが、「柱を40本にしろ」という王の命令があったとかで、それに対し「正面の池に映って40本に見える」と、一休さんのようなトンチの名人が答えたとか答えないとかに由来して命名されたという。

20本の柱は、この宮殿内にあった杉の木を使用して造られ、建造当初は全て鏡で覆われていたそう。



(内部に入ると天井は鏡張りで、建築当初の面影が窺われた)

玉座の間の壁一面にはサファビー朝の栄華を物語る、戦争と宴の歴史画が描かれており、思わず見とれてしまった。ワインを飲んだり、ギターのような楽器を弾いたり、踊り子たちによってもてなしている宴会図や、オスマントルコとの戦争図、像も登場するインドとの戦争図、さらにはイラン王がトラの毛皮をまとったようなインド王と踊り子たちを見ながら会見している図など、歴史的な興味をそそられるものであった。



(ワインと楽器でもてなし宴会図 踊り子オスマントルコとの戦争図)



(インドとの戦争図 イラン王とインド王と会見図 ウズベキスタンとの戦い図)



(火祭りの図)

戦いに行った王を想って溜める涙壺)

また、王妃の間には12月の最終火曜に行われる火祭りの図があったが、これ

はゾロアスター教の火の文化の名残であるという。ガラス製の涙壺も飾られていた。

続いて、11 時 45 分にアルメニア正教バンク教会を訪れた。17 世紀初頭、アップーズ I 世によって呼び寄せられたアルメニアの職人たちは、ザーヤンデ川の南側に居住し、ここは彼らが信仰したギリシア正教会の一つである。

教会といっても、多分にイスラムの影響を受けているようで、モスクのようなドームも見られた。しかし、考えてみるとお茶の水のニコライ堂も丸いドームだったから、正教会っていうのはイスラムの影響を受けていたんだあ〜。



(ドームを有するバンク会と中庭)



(しっかり十字架が描かれている かわいい女子高生たちも、バンク教会の見学?)



(内部のように美しい絵が外部にも描かれている。お土産店のタイルと街の様子)

イスラムとキリスト教が融合した内部は撮影禁止であったが、システィーナ礼拝堂のように、キリストやノアをはじめ聖人たちの絵が飾られていて美しかった。「最後の晩餐」や、トルコのアララト山に刑務所を造って、ギリシアから来たグレゴリーさんを拷問にかけたという絵もあったが、ワヒドの説明はよく分からなかった。内部の絵はちょうど2年前に修復されて綺麗になったという。



(食事には必ず生野菜が付いた ‘ウルトラマンごっこ’ なんかないように～)

12 時半から昼食で、鱈の唐揚げとかが出て、なかなか美味であった。ワヒドが“イラン人はニンジンジュースにアイスのをのせるのが好きです～”などと話していたが、えっ、ニンジンフロートかよ～(-_-)。ちょっと考えさせて欲しいなと思った。また、何故かこのレストランでは扇子をくれた。

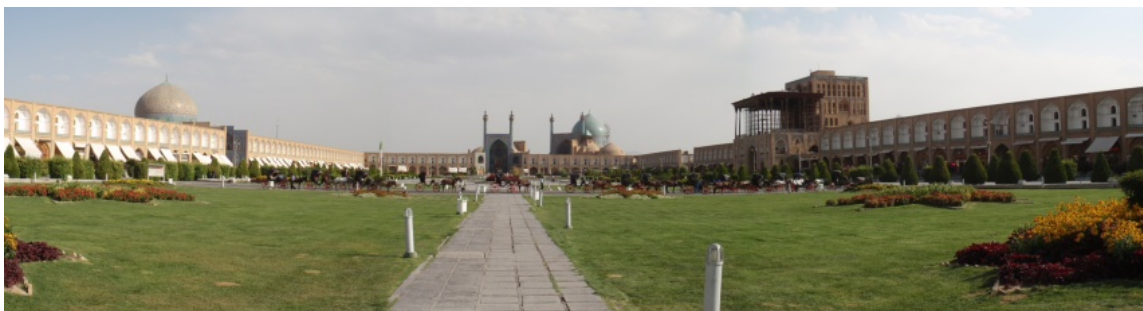
13 時 50 分にレストランを出発したが、歩いているお坊さんを見つけたワヒドは“坊さんは仕事しなくていいです～”などと笑っていた。

14 時 10 分、いよいよイマーム広場に到着となった。アッバース I 世により、政治・経済・宗教の中心として建設されたこの広場は、「世界の縮図」とも称されていた。世界遺産の広場としては、天安門広場に次ぐ 2 番目の大きさであるという。

縦 510m、横 163m の広大な広場は、周囲を 2 層のアーケード（回廊）によって囲まれ、その内側はおみやげ屋が軒を連ねている。四方には北にゲイサリエ門とそれに続くバザール、南にイマーム・モスク、東にシェイク・ロトフィラー・モスク（王族の寺院）、西にアリ・カブ宮殿など、イスラム芸術の粋を集めた建築物が配されている。



(イマーム広場は‘世界の半分’にふさわしい！)



(左がロトフォラー・モスク、正面がイマーム・モスク、右はアリ・カブ宮殿)



(昼は暑くて馬も可哀想だったが、夕方になると馬車に乗る人も！ 噴水が涼しげだった)

まずは、アリ・カプ宮殿からの見学となった。ワヒドから“何階建てに見えますか〜？”という質問があり、僕はてっきり4〜5階建てくらいかな？と思ったが、6階建てになっていてイラン最初の高層建築物であるという。狭い階段を登ってバルコニーに上がると、そこはかつて王（サファビー朝ペルシャでは王のことをシャーと呼んだ）がポロを見物したところであり、諸外国の使節を謁見したところでもあるそうだ。ワヒドによると、ポロの発祥はイギリスでなく、元々はインドで、そしてイランで発達したスポーツであるという。現在でも、ポロのゴールの跡というのが残っているとのことで、よく見ると確かにゴールらしい白いポストが2本あった。



(ポロのゴール跡も見える 皆さん〜説明を始めます〜 バルコニーからの眺望は見事！)

バルコニー中央部は工事中でちょっと残念であったが、眺めは素晴らしく、広場の全容から、先ほど足を運んだジャメ・モスクや彼方の山々まで望むことができた。



(アリ・カプ宮殿を支える柱は18本ある 彼方の山々まで見渡せる)

さらに階段を登ると最上階は音楽堂になっており、壁は奇妙な瓶を模った音響装置の役目をして、音が周囲に漏れないようになっていたという。



(音楽堂は音が吸収されて外部に漏れないような構造になっていた 1Fの広場の模型)

イスラム教では酒、踊り、音楽、女…等は禁止ということで、シャーが隠れて音楽を楽しんで、ワインを飲んで女と戯れたところであると、嬉しそうにワヒドが話していた。



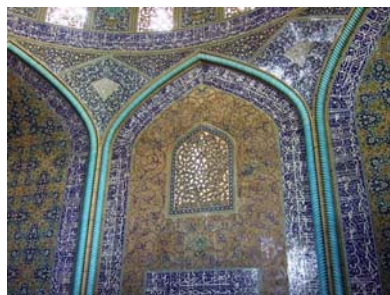
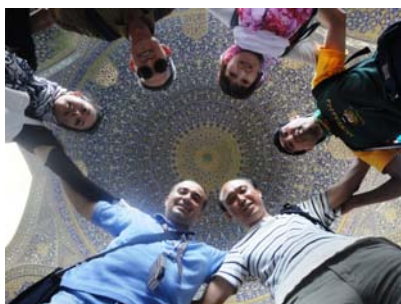
(イマーム広場の模型 に続いてシェイク・ロトフォラー・モスクへ 素晴らしいタイル)

次に、広場を横切ってシェイク・ロトフォラー・モスクへと足を運んだ。ここは 400 年前にシャーが奥さん達のために造らせた秘密のモスクで、王族専用であり、ミナレットや中庭がないことが特徴である。ワヒドが‘秘密のモスク’なんて言うと、変なことを想像しちゃうけれど、シャーの妻たちは宮殿から秘密の地下道を通してこのモスクで礼拝をしたそうだ。現在、この地下道は見学できないとのことであり、非常に残念であった。

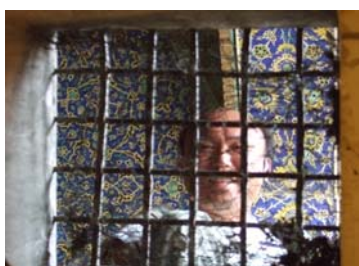
ワヒドによると、このモスクはミヒラブが素晴らしいということであったが、確かに、このモスクのペルシアン・ブルーは天井、壁ともに青さが深いように感じた。ミヒラブの造りも見事であるが、何よりも孔雀の羽根をイメージさせているというドームの天井は驚嘆に値し、光によって、孔雀の尾ができてしまうというアニメーション的な細工も見事であった。



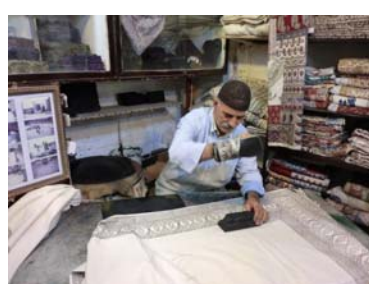
(ミヒラブや天井もすごい！ 光によって孔雀に尾ができてしまうという！！)



(天井に向かってチーズ あらぬ格好で失礼！ ベージュのタイルも素敵であった)
 カメラを床に置いてオートシャッターで天井方向を撮影したが、何故か変な
 ところでシャッターが切れてしまい、あらぬポーズで写ってしまったア～(‘_’)
 そうそう、皆で写真を撮る際、ワヒドは‘チーズ’でなく、‘飲んでも飲んでも
 酔えないビール！’と言って受けていた(*^^)v。



(階下から原田さん～！ これは上から？ 地下は召使いのお祈りの部屋)
 イマーム・モスクに向かう回廊にはおみやげ店の他に工芸品の店が多く、職
 人街のような感じであった。

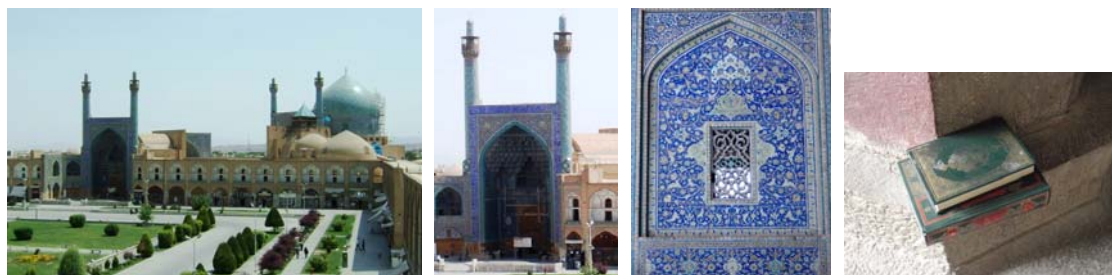


(この辺りの回廊は職人街となっており、銅細工や皿の絵付け等も行われていた)



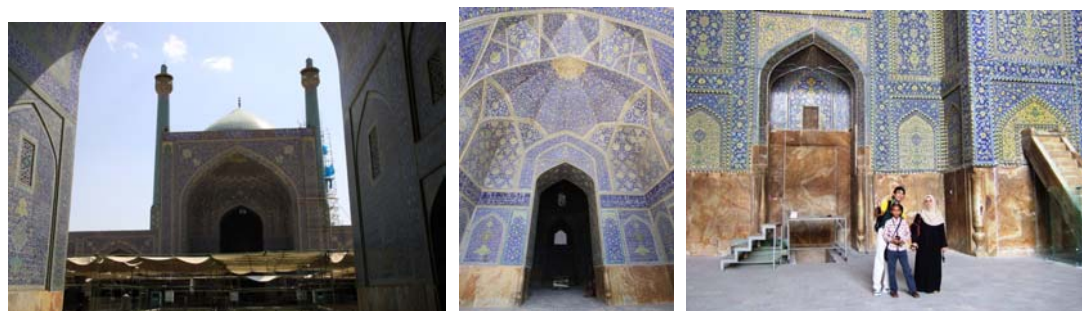
(バザールを通過、生々しい銃弾跡が残るイマーム・モスクの門へ)

続いてイマーム・モスク（王のモスク）を訪れた。まずは門に注目！サファビー朝時代の戦争の鉄砲の跡がいまだに生々しく残っている。このモスクは門に 8 年、モスクで 20 年と計 28 年もの歳月を要して完成されたという。



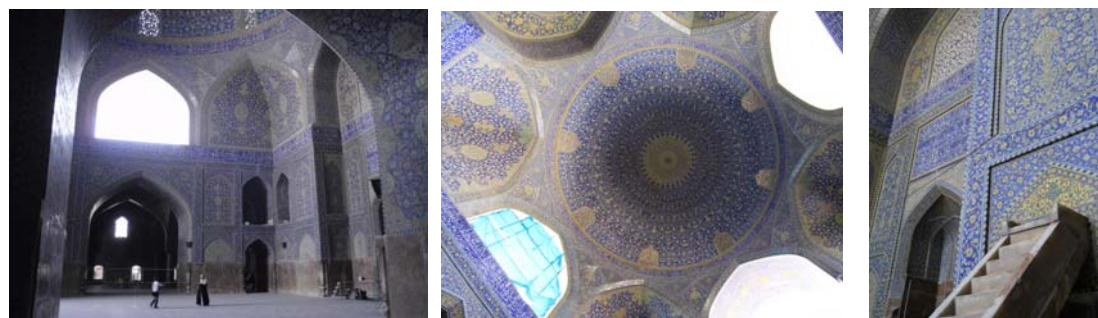
（広場に面した門のイワーンは素晴らしい 周辺部のタイルも凄い 柱の隅にコーラン）

この門は広場に面して造られた装飾的なもので、聖なる空間と世俗を分ける役割を果たしているという。門をくぐり中庭に出ると右 45 度斜めメッカの方向を向いたイワーンが聳えている。わざわざメッカの方向に向かって造り直すというのが宗教の凄いところだね。

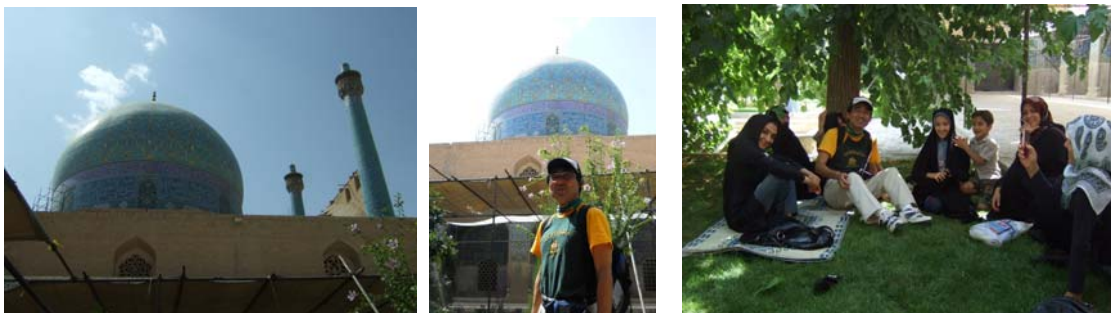


（門を抜けると、右 45 度にメッカの方向を向くイワーンが 中央礼拝堂の内部）

中央礼拝堂は広くて、この天井ドームも青のタイルが素晴らしかった。また、ドーム内は音響効果がバツグンで、7 回のエコーが聞こえるという。ワヒドが床石を踏み鳴らすと、確かに 7 回ほどの反響が確認できた。そこで僕が胸部を叩きながら「われわれは宇宙人だ～～」とソフトバンクの CM を試みたところ、大井さんにはバカ受けした！（ガタガタ道を通る時に、彼女も同じことを口ずさむそうだ^^♪）。



（広い中央礼拝堂のドームは青いタイルが美しく、エコー効果が抜群であった）



(ドームが頭、ミナレットが手で人が祈っているように見えるという 木陰で安息中?)

16時に閉館ということで、イマーム・モスクを後にし、徒歩5分ほどでワヒドの知り合いという絨毯屋さんに到着した。誰かのリクエストということで訪れることになったそうだが、店の方(社長さん)の説明はあまり面白くなくてちょっと退屈であった。僕は絨毯に興味がないので、早くバザールに行って“イー チャンデ?”を試したかった。



(ちょっと退屈したけど、空飛ぶ絨毯はないのお? ワヒド: 高いですよ〜)

その後はバザールで、約2時間の買い物タイムとなった。初めはワヒドの後について行ったが、彼の薦める店はちょっと **expensive** であったので、いろいろ歩き回った。のどが渴いたのでどこかでお茶でもしようかと思ったが、ラマダン中のために喫茶店・チャイハネは夜にならないと開かないというので、斉藤さんとノンアルコールビールを購入して、ピスタチオやヒマワリの種等の店の前に陣取り、それらをツマミにして飲んだービールのアルコールもフリーだけど、これらの豆もフリーね(^^)。ちょっと図々しかったけど、「この豆は結構いけるとか、これは不味いとか」ととても楽しく時間を潰せた。



(斉藤さん、美味しいですか?いろいろ歩いて、バザールの雰囲気を楽しむことができた)

そして少し落ち着いたところで、この自由時間の間に本日が誕生日という川

原さんへのプレゼントを買わなければならないので、何にしようか迷いながらバザールをさまよい歩いた。戸塚さんから「鹿島さん、何か選んで買っておいってください〜」と言われ、OK したものの、若い女性へのプレゼントなんて何年、いや何十年振りだろうか〜(^^ゞ。

いろいろ考えた末、トルコ石、いやイラン石を選んだ。ちょうど購入の際に丸山さん、石橋さんも同じ店にいたので、彼女たちの賛同も得て、なかなか気に入ったものをゲットできた。イラン石の購入にバザールの滞在時間の半分以上を費やしてしまったが、喧騒のバザールでペルシャ美女と遭遇することができず、バザール＝川原さんというイメージを残してしまったあ〜(;O;)。

19 時 15 分、再集合のイマーム・モスク前にいると、日本語の解る地元の人がいて少し話したのだが、昨日覚えた「イーネ チャンデ?」、「ロットファン ビッシタール タッフイフ ベディル」を披露すると、“上手いです、いい発音です!”と褒められてちょっと嬉しかった。でも実際、バザールではあまり役に立たなかったなあ (笑)。

回廊内のレストランで 19 時 20 分から夕食となった (アパシーホテルではなかった〜)。マトンカレーはちょっと辛かったけれど、ヨーグルトを混ぜてまろやかにして美味しく頂くことができた (それでも汗ビッショリになってしまった)。その後は川原さんの誕生パーティーで盛り上がった。



(Happy Birthday to you !(^^)!

そのイラン石、とってもお似合いよ(^^)v



(幻想的な夜 のイマーム広場)

夜の帳に包まれたイマーム広場は、昼とは異なりちょっと幻想的であり、涼しくなったことで家族連れや若者たちがたくさん繰り出していた。



(チャイハネは阿片窟?のような感じだった ホテルでワヒドと初めてのツーショット)

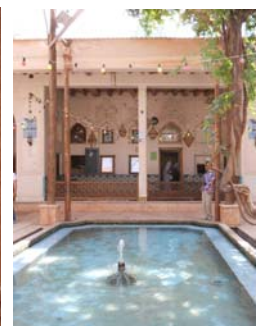
20 時 50 分にレストランを出て、近くのチャイハネに寄った。水タバコの臭いがキツくて、思わず阿片窟?っていう感じのところであった(-.-)y° ° °。チャイを飲んで、岡本さんのキャノンのカメラのスライドショーを見ながら楽しい旅の話で盛り上がった。

1 時間ほどでチャイハネを後にし、22 時 10 分にホテル着となった。いよいよイラン最後の夜となってしまった。ざっと荷物をまとめた後、戸塚さん、原田さん、三浦さんと 4 人集まって、飲んでも飲んでも酔えないビールで祝杯をあげた。地下鉄工事のところでも感じたのだが、中国に押されっぱなしの我が国であるが、親日的なトルコ、イラン、タイ、インドネシア、そして南沙諸島問題で揉めているベトナム等の国々と対中国路線のアジア連合を形成していかなければ、中国にやられっ放しになってしまう！等という硬派な社会問題で盛り上がった。皆さん、とってもいい方ばかりで、とても嬉しい、心温まる旅のワンシーンとなった。

8 月 17 日 (水) 晴れ

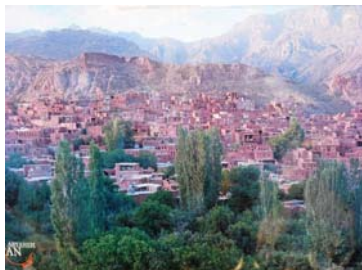
8 時に出発し、カナートの井戸が点在する荒野を進み、一路、アブヤーネ村を目指した。この風景を見て、ワヒドから、イランにはザクロス山脈とアルボーズ山脈の 2 つの大きな山脈があつて、ヨーロッパ方面から来た雲がこれらの山々を越えられないので雨が降らないという説明があつた。

10 時 40 分にアブヤーネ村に到着した。



(アブヤーネ村の案内図と赤土でできた村の建物 モスクとして使用されているお墓)

ゾロアスター教の時代から脈々と続くこの村は、標高 2000m、拝火神殿や古い家々、モスク等、歴史ある建物が昔の姿のまま保存されている。



(村の全景—ポスターを撮影

この村は時間がゆっくりと流れている)

人々も古くからの生活を踏襲しており、女性は花柄のスカーフ、男は裾の広いズボンをはいている。冬には降雪もあり、リンゴ、杏、胡桃等をドライフルーツにして、また羊や牛等の乳製品を造って生活しているという。若者のほとんどは街に働きに出て行ってしまい、村のお祭りの時などに帰郷するのみであるという。しかし、帰郷の際には、若者たちも伝統的な衣装を身に着けるとのことだ。



(花柄のスカーフと幅広のズボンがこの村の特徴)

この村のほとんどの人が現在もゾロアスター教の信者であり、特徴ある服装もその名残であるという。建物や人々の生活だけでなく、この村の風景、空気、水等すべてがイランの歴史を感じさせてくれる。



(どお、似合う？ キレイな水も流れている 鼻に白いテープが！？日焼け止め？)

村を観光している若い女性の鼻に白いテープが貼付されていたが、イランではシラーズやイスファハンでも、このような女性を見かけた。勇気を出して話しかけて聞いてみると、な、なんと、鼻を低くするために鼻骨を削る手術をし

たという。女子大生の彼女は、イランではスカーフをするので鼻が高いと目立ち過ぎておかしいので、このような手術をする女性も多いという。ところ変われば～だね！日本では聞いたことがない美容形成手術だぁ～。

村を巡った後は、村唯一の高層建築物？であるホテルで、イラン最後の食事となった。シチューとチキンケバブとともに、生姜やザクロ、ラズベリーのビールを飲んだが、どれも炭酸ジュースであった。結局、イランでは、レモン、ストロベリー、ピーチ、ザクロ、マンゴー、ラズベリー、パイン&オレンジそして生姜といったノンアルコールビールを飲んだが…やっぱり普通味が一番だった。でもやっぱりアルコール入りがいいね(^^)。



(種々のノンアルコール飲料)



チキンケバブ



食後のチャイブレイク)

食後、ホテルのレストランに併設されているチャイハネに先ほどのイラン美女がいたので、あまり通じない英語であったが、話がはずんで盛り上がった。『ペルシャの市場にて』の‘美女との遭遇’の想いはアブヤーネ村で現実となったぁ～(*^^)v。「アブヤーネ村の人は蜂が嫌いなんだよ、‘虻、ヤーネ～’」なんて親父ギャグを言ってる場合じゃないよ！

ほっぺを寄せて写真を撮ったり楽しく話したりしているところに、やおらワヒドがやって来て話し始め、“この女性（黒い衣装の方）と私の家とは近いですぅ～”と言って、電話番号の交換をしちゃったよぉ！“鹿島さん、このヒトを日本にお持ち帰りしちゃいますかぁ～、でもまず僕がお試し、味見してからねえ～、イランのルールですぅ～” だって(>_<)。僕がちょい悪オヤジなら、ワヒドは超悪オヤジ～！



(謎のイラン美女とは、この村で何度か遭遇した　でもワヒドに獲られちゃったぁ～)

13 時 20 分に出発し、最後の観光地であるフィン庭園に向かい 1 時間半ほどで到着した。つい最近、世界遺産に登録されたとかで、それゆえ今回のツアー

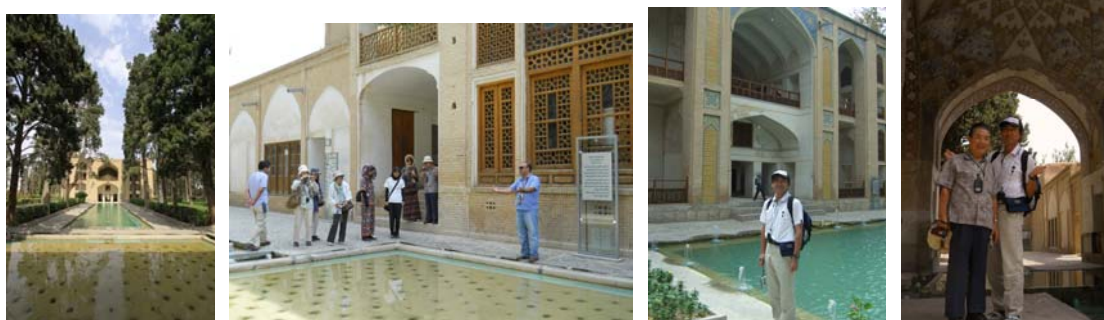
は『ペルシャ 3 大世界遺産紀行』でなく、『4 大世界遺産紀行』ということになる。

テヘランとイスファハンのちょうど真ん中にある街カシャーンの郊外、水源地にあるこの庭園は、この街を愛したアッバース I 世によって 16 世紀から公園として整備された。



(フィン庭園の入り口と美しい糸杉の並木)

門をくぐって入ると、細長い水盤の両脇に糸杉の並木が列をなし、その先のプール越しにシャー・アッバースの離宮が目に入った。



(シャーの離宮 きれいな水は涼しげでホッとさせられる)

ここはガジャー朝の名宰相アミーレ・キャビールが暗殺された場所としても有名とかで、その場面を再現した人形が飾られていた。シャー専用のハمامもあり、それゆえ、ここには床屋さんやマッサージの人もいて、反大臣派は床屋さんに大臣の手首を切らせたという。



(ハمامに貼られた大理石 大臣の暗殺風景と口封じのために監禁した使用人)

それほど広くなく、はっきり言って大したことないのに、よく世界遺産になったなあ、というのが素直な感想である。これくらいなら日本だって、鎌倉を

はじめ多くの古都が、今後続々と、世界遺産に認定されていくだろう(^^)v。



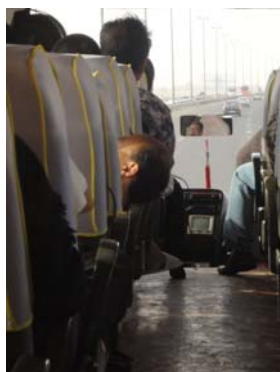
(えーん、まだ帰りたくないよお～(>_<) バラ水の販売店 裏手にある水源地)

その後は門の外にあるバラ水を打っている店とか、裏手にある水源地の方を歩いて 15 時 30 分に出発した。これですべての観光は終了である。バスに揺られると、ちょっと感傷的な気分になった。17 時にドライブインで休憩。アイスを食べた。さらに 10 分ほど進むと、右手に干上がった塩湖が見えてきた。



(ドライブインは混雑していた 干上がった塩湖)

その後、ワヒドが一人一人の名前をペルシャ語の飾り文字で書いたのをプレゼントしてくれた。素晴らしい！昨夜、戸塚さんたちと飲んでいる時、隣の部屋のワヒドと一緒に飲まないかと声をかけたのだが、“ごめんなさい～、私は、まだ仕事があります～” といって部屋に戻って行ってしまったが、これを書いていたのかあ(^^)。



(バスの中では… 飾り文字で kashima kenji と書いてくれた!(^^)！)

17 時 40 分になると、大井さんから出国の説明があり、続いてワヒドのあいさつがあった。空港では女性と握手したりキスしたりはご法度なので“チャンスは今です～”と笑わせ、“またね～”で締めた。

空港では、ワヒドの観光会社からとのお土産ということで、紅茶とバラ水、バラの花が配られた。最後に、全員で写真を！と思っていたが、何やら慌ただしく空港内に入ってしまった。

空港ではハーフの子供と一緒に‘日本に帰るイラン人’が何人か目につき、話をすると千葉とか埼玉に戻るということであつた。また、イミグレーションで並んでいると、行きのフライトでお世話になった日本人 CA の Sachiko さんから声を掛けられ、彼女も今日までオフでイランに滞在していたという。よく覚えていてくれたなあ、と話すところ“久々の日本のお客様でしたから”との答えであつた。彼女のエキゾチックな容姿は将にイラン航空にふさわしいが、“随分と日焼けされて健康そうになりましたね。鹿島さん、行きと全然違いますよ！”と再会を喜んで話してくれた。

ビジネスラウンジで軽食をとったが、ハムサンドが美味かったので、原田さんと岡本さんにオミヤにして持って行ってあげた。



(IR800 便と機内からみるテヘランの空港 ワヒドがくれたバラの花)

IR800 便には 19 時 30 分に搭乗したが、何やら随分とのんびりしていて、機体が動き出したのは 20 時 40 分ころであつた。

一番前の座席であつたので脚が延ばせてラッキーであり、近くに座ったイラン人たちとはフレンドリーに話したので退屈しなかった。春日部居住の男は、バブルの頃に日本にやって来て日本人女性と結婚したといい、Sachiko さんのことを“サッチャン”と呼んで親し気であつた。また、高輪でイラン料理店をやっているという男は、新橋や麻布十番とかでもイランの輸入品（絨毯とか）を売っているのとカタログをくれて、ぜひ連絡してくれとのことであつた。

彼らから今回の 8 日間のツアー（食事込み）の値段を聞かれたが、彼らは口々に“それは安い〜”と言っていた。日本とイランの往復運賃はエコノミーで 13 万円くらい、ビジネスで 27 万円くらいだと話していた。

さらに話は盛り上がり“テヘランの空港近くにあるイマーム・ホメイニの霊廟や、イスファハンにあるシェイキング・ミナレットは行かなかったのかあ〜” “カスピ海沿岸にはサーリーをはじめ、いい温泉があるのにい〜” といろいろとイランの話を教えてくれたが、結局はイランを周遊するには 3 カ月は必要！ ということで落ち着いた。

8月18日（木） 晴れ

朝、北京に到着すると8割の乗客は降りてしまい、機内はガラガラになってしまった。日本は完全に時流に乗り遅れ、置いてきぼりを食った感じ。うーん、中国恐るべし！このままじゃ我が国は本当に取り残されちゃうよ～(>_<)。

このブレイクの間に、皆さんの席を見廻ったり、原田さん、丸山さん、石橋さん等が僕の席に遊びにきてくれて写真を撮ったりして過ごした

13時10分に成田着陸となった。34℃で蒸し暑い～。入国審査を終え、スーツケースを受け取った後、スカイライナー待ちの間に一杯飲んで過ごした。‘チーム川口’の存在があることから、成田から川口まで一緒に帰るなんていうのも初めての体験であった。本当に今回の旅行は楽しかった。イランにしてよかったあ～(^^)v。



（大井さんも頬をなでてくれた～！

成田空港でひと休み）

あとがき

夢のような8日間であった。素晴らしいTDとガイド、そして素敵なメンバーに恵まれ、本当に毎日毎日が夢の世界に居るようであった。こんなに楽しく旅をしたのは久しぶり、いや、初めてかもしれない。生まれてきてよかった～！と実感できる旅行であり、将にプライスレスな時を過ごせたと確信している。

今までの「旅行紀」にも、旅とは‘出会い’であり‘癒し’であると述べてきたが、今回はその両方を十分に満足させることができたと感じている。ペルシャの偉大な歴史や雄大な風景との出会い、気さくな現地の人々や一緒に旅した仲間たちとのふれあいは、心身の癒しにつながっていく。

旅行中お世話になった皆さんに、この場を借りて衷心より御礼申し上げます。ありがとうございました。特に、Aグループの戸塚さん、島津さん、川原さん、写真をたくさん撮って送ってくれた岡本さんをはじめ、CDや写真を提供してくれた丸山さん、石橋さん、原田さん、武内さんには、この『旅行紀』作成に当たりスペシャルサンクスです<(_)>。

おかげで今回は、60ページを超える超大作になってしまいました。旅行中は

簡単なメモをとっているが(../)ゆ、速記体（きたなくて読めない文字）のため、結局、その文字から連想して記憶を蘇らせるしかなくて、ちょっと怪しいところもあるが、自分なりに咀嚼して『旅行紀』を書き上げることができました。旅行中に‘暗記パン’（単行本 2 巻参照）を食べておけばよかったあ〜。あッ、イランだから‘暗記ナン’だね（笑）。

『旅行紀』を書いていると、まだ皆と一緒にイランを旅行している気分になってしまい、楽しい日々を送ることができました。

今後もいい旅行をして、充実した人生を送りましょう(^.^)v

また、一緒にどこかに行きたいですね!(^^)!